

---

# 芥川龍之介の歯車

リペヤー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

芥川龍之介の歯車

### 【Nコード】

N6050F

### 【作者名】

リペヤー

### 【あらすじ】

東方project二次創作。秋の妖怪の山。ふらふらとぶらついていた河城にとりほ、その最中に妙な歯車を見つける。はてさて、これを落としたのは誰なのだろう？好奇心に駆られ、にとりほそれを拾っていくのだが……？河童と機械の絆のお話。

## 一章

むかしむかしあるところに、おおきなおおきなくにがありました

夕刻の妖怪の山に、さわさわと秋の風が吹く。秋風は払い落とし、紅葉を巻き込み、鮮やかな彩をその身に纏わせている。そんな秋の山で河童が一匹、歩いていった。とはいっても人間の伝承にあるような姿ではなく、水色のワンピースを着て、頭に奇妙な帽子（皿の代用だろうか）を乗せた少女の姿だった。名を、河城にとりという。

にとりはこれといった当てもなく、ふらふらと妖怪の山を歩いていた。友人である白狼天狗の犬走椋に「たまには外の空気を吸え」と、家から引きずり出されたためである。機械弄りを趣味とする彼女は、何日も己の家に閉じこもることが多く、言われてみれば確かに一週間近く外に出た記憶がにとりにはなかった。だがしかし、そう

言っておいて櫂はさつさと仕事である山の警備に戻ってしまったている。これはいささかひどいんじゃないかと、にとりは考えながら気の向くままにぶらぶらと歩みを進めていた。

そんな調子でしばらく歩いていると、にとりはとある溜池にたどり着いた。緑色の藻が浮いていてあまり清潔には見えないという点以外は、別段何のへんてつもない、ただの溜池である。にとりにとってこの辺りは庭の様なもので、この池にも来た事が無い訳ではなかったが、来るのは久方ぶりであった。

直径十五メートルほどのこの池は、にとりの知る限り彼女が妖怪の山に住む前からある。そういう意味ではそこそこ古い歴史があるのだが、何かの妖怪が縄張りになっている訳でも無く、この池にはいつも寂しい空気が漂っていた。そんな場所にわざわざ足を運ぶ趣味はにとりはなかったたので、この池にはあまり来る事がない。今日の様に、適当に足を動かしてもしない限り。

さてその池であるが、今日も今日とて閑静さを湛えている。目的もなくぶらついていたのは確かだが、こんな何も無い所に出てもしようにないので、にとりはくると身を翻して溜池に背を向けた。

水底で何かが光ったのに気付いたのはその時である。

視線を外すその瞬間、確かに金属的な何かの反射光がにとりの視界に入った。水面の反射した太陽ではない。水辺に住む妖怪であるにとりがそれと見間違えることなど皆無と言っていい。確かに今、水の底で何かが光った。

別にそれだけならたいしたことではない。水底に何かがあって反射するくらい、普段なら気に留めることにすらなるまい。……ただ、

今の光ったものはどうもおかしかった。明らかに光りすぎなのだ。前述したように、湖面には緑色の藻が浮いていて、水底などまるで見えない。その藻で濁った水面を突き抜けるほど強く光が反射し、ここまで届くものだろうか？

「……よし」

誰にともなく頷いて、にとりは背負ったリュックを下ろす。そしてここ一週間かけて作っていたそれを取り出した。

懐中電灯と呼ばれる、電気力によって灯りを作り出す外の世界の道具。壊れていたのをその辺で拾った物だが、にとりの手に掛ければ直す事など造作も無い。それより水中で使うために耐水性を着けることの方に時間を費やしている。その実験も兼ねて、少しこの池に潜ることにした。

「——よっ」

ざぶん。

服もそのまま、リュックを再び背負って軽い掛け声と同時に池へと飛び込む。藻が少しうざったかったが、河童のにとりにとってはあまり気にする要素では無い。カチリと懐中電灯のスイッチを入れる。灯りが濁った水の中を照らし出した。きちんと作動することを確認して、にとりは勢いを付けて一気に底へと潜っていく。

池は存外に深かった。ぱっとした感覚では、大人五人を縦に重ねてやっと水面に頭が出るかというところだろう。その所為か藻が漂っていたのは表層だけで、水中はそこまで視界が悪い訳でも無い（あくまで表層と比べて、だが）。池の底までたどり着き、水面を見

上げてみれば、飛び込んだときにできた波紋に藻がゆらゆらと揺蕩っているのが見えた。

さて、にとりは軽く息を整え、その手の懐中電灯で池の底を照らし——驚くほど早く、その光ったものは見つかった。ぎらりと強く懐中電灯の光を反射する何かが泥の底から半分ほど顔を出している。にとりはそれに近づき、掘り出した。

——歯車、だった。にとりの掌より少し大きいそれは全く錆付いておらず、新品同様といい鉄の輝きを見せている。なるほどこりゃよく光を反射するわけだ、にとりはそう納得するが、新たな疑問が鎌首をもたげる。

この歯車がどこからやってきたのか。先ほども言ったがこの池にはほとんど妖怪も寄り付かない。それなのに何故こんな工物が池の底に沈んでいるのか。自分以外の他の河童が捨てたのかもしれないが、わざわざこんなところに捨てに来る理由がない。それにまだ十分に使えるような歯車を捨てるような愚拳を技師種族の河童がするなと、にとりには考え付かない。じゃあなぜ？——そう考えている最中に、にとりが視線を横に動かしたのは何の意図もない。ただなんとなく、という以外に言いようがなかった。

濁った水の向こう、池の壁にぽっかりと大人一人ほどの大きさの黒い穴が口をあけているのに、にとりは気付いた。ぎよつとして見ると、その入り口あたりにも何か光る物がある。もしかして、にとりはその穴の入り口にまで近づいてそれを手に取る。——今度は少し小さめの歯車だった。

にとりはその穴を覗き込んだ。懐中電灯を照らしてみるが、それなりに深いらしく光は途中で途絶えてしまい奥まで照らしきれない。

にとりはふと以前の冬にあつた間欠泉騒動を思い出した。もしかしたらこの穴はあの時の影響が何かで出来たのかも知れない。いや、これくらいの深さがあるものが一度の地殻変動で作られるとは考えづらいから、もともとこの穴は昔から有り、土砂などで塞っていたのが崩れたのだらうとにとりは推断する。

手に取った二つの歯車と穴を交互に見て、にとりは一つの結論に達した。——この奥に、これを落とした何かがある。

そうと分かると、技師として好奇心が俄に湧き上がるのをにとりは感じた。得体の知れない暗闇への恐怖などが消えていくのも感じる。自分は河童だ、三十分と少しいは楽に息が持つ。仮にこの水中洞穴が予想より深かったとしても溺れ死ぬようなことはあるまい。にとりは最終的にそうまとめて、その暗い洞穴にへと潜り込んだ。

そこにはかみさまがすんでいて、そこにすむひとびとたちをおさめていました

真つ暗闇の水中を懐中電灯の灯りだけがボワリと照らす。……ちよつと甘く計りすぎたかな、にとりは舌打ちした。にとりの勘では、外れの池にあるような洞穴がそこまで深い訳が無く、せいぜい五分も進めば突き当たりに着いてこの齒車を落とした何かを確かめる事が出来るだろうと踏んでいたのだが、既に十五分近くこの洞穴を進んでいる。復路も同じだけの時間が掛かると考慮すれば、そろそろ引き返す事も考えねばならなかった。下手に進みすぎて、引き返す最中に溺れてしまうなど笑い話にすらならない。

にとりの体内時計がチクタクと残り時間を減らしていく。その状況下、にとりは好奇心と命を天秤にかけてみた。まだ若干、好奇心側に傾く。……よし、後一分だけ進もう。それで何も無ければ戻れば良い。にとりはそう決めて再び水中を進み始め——そこから三十秒も進まぬ内に、どこまでも続いているのかと思えたその洞穴の終着点に、にとりはたどり着いた。

袋小路では無い。突然、洞穴の幅が広がり、開けた場に出たのである。いや開けたというより洞穴を抜けたようであった。見上げれば懐中電灯に照らされた水面が見える。あー助かった、にとりは水上へと浮き上がった。

ぶは、と水から顔を上げて、久しぶりの空気を肺へと送り込む。数回ほど深呼吸をして息を整え、にとりは改めて周囲を見渡した。

地底湖、という奴のようだった。地下の大空洞の中に水が溜まって出来たのだろう。天井やら壁やらに懐中電灯を向けてみれば、相だな広さを持っていることが分かる。なんかすごいとこに来ちゃったな、というのがにとりの第一の感想だった。

そのあたりの岸から上がり、ぶるぶる頭を振って水を落とす（白狼天狗の椀によればこうやるのが水を落とす一番のやり方らしい）。そうしてから、じやり、と恐らく百年単位で誰にも踏まれなかっただろっ地底湖の土を踏んでみると、にとりの中になんとも言いようのない興奮が沸き立った。そのまま湖の淵に沿って歩いてみる。

歩きながらもにとりは軽く考える。本来の目的である歯車を落とした何かを探そうと思っていたにとりだが、この広さでそれをするのは結構骨を折りそうである。さてどうしたものか——かつん、とつま先に何かが当たった。

ん？　と思ひ拾って見ればそれはボルト。それも大きく太い奴でにとりの親指くらいの大きさがあった。さらに懐中電灯を地面に向けてみれば、あの歯車と同じようにぎらぎら光るものがにとりの数歩先にある。それも拾ってみると、今度は六角形のナットであった。同じように今度は……　そう点々と金属部品が転がっていた。

どれもこれもがまだ十分に現役を張れるような部品である。なぜこんなに工物がたくさん……　色々と推論をにとりは立ててみたがどうにも合点がいかない。何かが落としたのは間違いないだろうが、なぜこんなところに？　思考を頭でまとめながら、にとりはそれら

を拾い（途中から手に持てなくなったためリュックに放り込みつつ）湖の淵に沿って歩いていった。

丁度にとりが最初にあがったところから湖を半周しただろうか。十個目ほどになるだろうボルトを拾うと、かなり大きなものが懐中電灯の照らし出す範囲の端に転がっているのをにとりは見つけた。なんだありや、にとりはそれに歩み寄ってみる。

にとり数人分の大きさは軽くありそうなそれは、見かけは金属で出来た魚の骨を模しているようでもあった。支柱の大きな鉄骨から、五本の短めの鉄骨が垂直に取り付けられている。短めの鉄骨それぞれの間には薄い金板が付けられており、丁度それは蝙蝠の皮翼のようにも見えた。この大きな鉄塊も汚れてはいるがほとんど錆付いておらず（根元近くだけは錆が見られた）、ますますにとりの中で疑問が膨れ上がり——そこで心底驚愕した。

なんととは無しに軽く視線を上げたときだ。この魚の骨のような鉄骨と同じものが右側にだけ取り付けられた鉄の塊が、壁のあたりに転がっている。鉄の塊は胴体部分のようで、視線を上には持っていくと首らしき長い部分が懐中電灯によって明るみ出る。そうしてその首に沿って更に視線を上げていくと——鉄で出来たトカゲのような顔があった。

端的に言えば、『鉄の竜』がにとりを見下ろしていた。

「——うわ、すっごー！」

そこまで認識してようやく、にとりの中の驚愕が驚嘆にかわり、それへと駆け寄った。すぐに足やら胴体やらを見て、いくつか外れた部分がある事を確認する。間違いない。どうやらこれがこの歯車

やボルトを落とした奴のようだ。錆付かない部品を使っているあたり、何かすごいものだろうと予想していたが、まさかこんなものが出てくるとはにとりにも全く予想外だった。しかも特に凄いところは、この鉄の竜から一切の妖術や魔法の類の気配を感じないところだ。つまりこれは純粋な機械の竜ということである。

すぐにも持ち帰って設備のそろった家で研究をしたいところだったが、さすがに大きすぎるからあの洞穴を通ってそのまま持ち帰ることは出来ない。解体しなければならぬのだが、今日はそれが出来るようなそんな大掛かりな機材を持ってきたは居なかった。流石のにとりといえど、今持ち合わせているドライバー数本でこれを解体することは不可能である。仕方ない、今日は一旦引き上げて、明日あたりにアームを持ってこよう。にとりはそう考えて、惜しいながらもそれを背に振り返り――

がしゃん。背後からそんな音がした。

え？ と、にとりはたった今背を向けたその鉄の竜に視線を戻した。もちろん竜は沈黙を守っている。しかし違和感がにとりの体を覆い、訝しみつつもそれを見続けて——気付いた。

——顔の部分の目に、薄っすら橙色の光が点っている。

にとりが気付いたその瞬間、ギシ、と百年ぶりに動かした歯車が回るような——というより文字通りその音が暗い地底湖の中に響く。竜の瞳の光はだんだんと濃さを増しており、既に赤と呼んでもよい色に変わっていた。……冗談でしょ？ ととりは目の前の状況がよく理解できないでいた。確かに錆付いていないとはいえ、あれだけ部品の取れている機械が起動するなど（ましてや自立で）河童の技術力でも作れやしない。

そんなにとりの困惑などつゆ知らず、その鉄の竜はほとんど己の稼動部分を立ち上がらせていく。胴体と足の付け根の部分からは蒸気が噴出し、あの魚の骨のような部分——今気付いたがあれは翼

らしい——は相当長い間油の差されていないことを証明する軋んだ音を立てていた。にとりは腰が抜けてしまい、ぺたんと土の上に直に座りながらぼんやりとその様子を眺めていた。

そしてついに竜が立ち上がる。しゃがみこんでいた体勢でもあの大きさであり、まして今のにとりは座り込んでいるのだから、立ち上がったとなれば数段巨大に見えた。そうして片翼の鉄の竜は洞窟の天井を見上げる。ぞっ、と悪寒がにとりの背を走り、その悪寒に身を任せて目をつぶり耳を塞いだ直後。

——咆哮。

いくら広いとはいえ限定された空間であるこの地底湖で咆哮などすればどうなるか。硬い岩壁は存分に音波を反響し音の大きさを飛躍的に増大させた。

刹那のタイミングでその直撃だけは避けたにとりだったが、激烈な音波を完全に防ぐにはその小さな手だけでは不可能だった。爆音にぐわんぐわんと揺れる頭でなんとか気絶しないように意識を保つ。火花が散る視界の中、にとりは軽率な行動をとったことを猛烈に悔いていた。こんなところ来るんじゃないかった。後悔先に立たずという言葉が今になって身に染みる。

ようやく爆音が小さくなり始め、視界の火花が収まった所できりと目を開けた。そしてやっぱり目を開けるんじゃないかと後悔した。何故なら、目の前にあの竜の顔があったから。

並みのナイフなんかよりよほど切れそうな牙がぞろりと並ぶ口が息も当たるような間近にあった。じつとあの赤い瞳がにとりを睨みつける。機械つて妖怪を食べるんだっけかな、ああ食われる側つて

こんな気分なんだ、と半ば朦朧とする意識の中でにとりが覚悟を決めた。それと同時に竜が口を開けて――

「ぎゃう」

なんか意外とかわいい声を上げた。

「……………うへ？」

一飲みにされるのかと身構えていたにとりだったが、その余りにも拍子抜けする可愛らしい声に思考が空回りする。そんな様子を知ってか知らずか、竜はその顔先でつんつんととりの背にあるリュックをつついた。

「……………な、なに？」

にとりは顔を引きつらせながらもそれを竜に見せられるように前に出す。そうすると竜は足元を顔先で指した。踏み潰されるんじゃないかと、にとりは恐る恐る竜の懐近くまで入り込む。

見れば、鉄で出来た爪の部分に穴が開いていた。いや、破損で開いたような穴ではない。この穴はひょっとして、にとりはリュックから拾ったものの一つである大ネジと、愛用のプラスチックを取り出した。

思ったとおり、その大ネジはぴたりとその穴の大きさに収まる。

にとりはプラスドライバーできゆるきゆるとネジを回し、ぎゅっと  
しっかりねじ込んだ。

「……こ、これでいいの？」

にとりは竜の顔を見上げた。真紅に染まっていた瞳は幾分か薄さ  
を取り戻していて、今は濃い橙色をしている。おかげで先ほどより  
は表情が和らいだように見えた。

「——ぎゃうぎゃう！」

うんうんとでも言うかのように首を何度も縦に振る鉄の竜。する  
と今度は転がっていたあの魚の骨のような翼を顔先で指し、さらに  
翼の無い左肩をつつく。どうやら竜は「ここを直してくれ」と言い  
たいらしい。

「——ちよちよちよ、待って待って待って」

「ぎゃう？」

にとりは慌てて手を振って制止する。その行動の意味くらいは分  
かるのか、竜は不思議そうに首を傾げた。

わけが分からない、というのがにとりの現状である。とりあえず  
今この瞬間に食われるという危機は去ったらしいが、なんでこの機  
械は生きているみたいに自立稼働できるのかとか、なぜそれを自分  
が直さなきゃいけないのかとか、知りたいことが山積みであった。  
いやそりゃ直してやってもいいのだが（解体しようという気は流石  
になくなった）、今の状態では無理である。

「あ、あのね？ 直して欲しいっていうのは分かるんだけど、私は

今あなたを直せる道具を十分に持つてきてないんだ。それ取りに戻ってもいいかな？」

「――」

すーっと、疑わしげに竜の瞳が赤みを増した。

「い、いやね！？ 逃げたりしないよ！？ で、でもね、ちょっと本当に無理なの！ ほら私こんなに小さいじゃん！？ 大きな機械の力を借りなきゃ流石に無理って、機械の貴方ならわかるよね！？ そ、それと私の家ここからすつごく遠いから、たぶん明日の朝くらいになっちゃうんだけどさ、絶対戻ってくるから！ いいでしょ、いいよね！？」

凄まじい狼狽の中で何とか言い訳を作り出す。言い終えて理屈が通ってるかかなり不安になったが、もうここまでできたら賭けるしかない。言葉とは弾幕と同じで、一度放たれれば傷つけるか外れるか以外に無いのだ。

数秒の沈黙。

「――ぎゃう」

――分かった、待ってるよ。にとりの主観的翻訳にはそう聞こえた。実際うなずいてはいるので半分くらいは当たっているだろう。

「お、おっけー！ 約束はまもるよ！ じゃ、じゃあ明日ね！」

ずざざざざ、とにとりは器用に竜から目を切らずに後ずさり。そのまま湖にバク天ダイブを見事に決め、すぐさまあの洞穴にもぐりこむ。後は全速力で長い洞穴を泳ぎ――気付いたらにとりは、あの

藻だらけの池の水面から顔を出していた。

はた、と我に返り、べたべたとひつつく藻をはがしながら岸に上がる。にとりはそのままごろんと岸辺に仰向けになった。

空は大分暗くなっていた。東の空から夜の帳が降り始めている。その空を見上げて、にとりは奇妙な感覚を覚えていた。助かった、とも、すごいものをみた、とも、少し違う何かを。

「……なんだったんだろ、あれ」

にとりのぼそりとした呟きに答えてくれる者はいなかった。人間も妖怪も、機械でも。

あるときそこに、ひとりのかしこいおとこがやってきました。

太陽が昇り始めた早朝。にとりは自分の家の布団で目を覚ました。

あの後、あそこでしたら横になってから家に帰りそのまま寝入ってしまった。家に着いたのが日が沈んですぐだったから、丸半日ほど寝てしまったらしい。寝すぎてむしろ頭痛がする頭をなんとか持ち上げさせてにとりは布団から起き上がった。

居間に出て、ちょうど机に置きっぱなしだった食パン一斤を袋から取り出し、もむもむとバターもジャムも何もつけずにそのまま食む。少々味気ないといえば味気なかったが、正直そうすることも億劫だった。

放置していたためばさばさする食パンを食べながら、腰掛けた椅子を軋ませつつにとりは昨日の体験を反芻する。なんであんなところに河童でも作れないような機械の竜があるのか、それがまず最初に浮かんだ疑問だった。が全く見当がつかない。そもそもあんな地底湖にどうやってあれを作るための機材を運んだのか。あの水中洞穴を通って部品を少しずつ運び、あの地底湖で組み上げた？ 馬鹿なコストと時間がかかりすぎるし、そんなことして何の得になるというのか。いやそれよりあれを誰が作ったのか。河童ではないだろう。にとりの知りうる限りの河童の機械学ではあんなもの作れやしない。

膨大な疑問が湧きあがるが、それらはぐるぐるとにとりの脳内を駆け巡るだけでなんら解決へと進もうとしない。それらを置いてお

くとしても、もうひとつ、重大な課題があった。

にとりがあの竜を直す、ということだ。あのときはかなり混乱していて支離滅裂な考え方をしていたが、よくよく考えれば竜を直す必要も義理もないし、仮に約束を破ったとしてもあの竜が復讐に来れるだろうか。来れはしまい。というか、もう一度あそこに行くのは正直恐ろしすぎる。

いやいや、にとりは首を振った。打算だけで考えるにしてもあれを直すのにもメリットがある。まずあの技術を調べ上げれば河童の機械学も著しく発展するに違いない。にとり自身、あの竜が動く前まで解体して調べようと思っていたのだ。それをただ恐いから、という理由だけで放っておくのはいささか勿体無いかもしれない。

他の河童と一緒に行く、という考えがにとりに浮かんた（椀は無理だろう。あの洞穴で絶対溺れる）。付き合いの狭いにとりだったが、同種族の内くらいにはいくらか知り合いもいる。……しかし思ってすぐに却下した。理由はあの咆哮。あのとき自分はへたり込んでしまったからあまり竜を刺激しないですんだが、他の河童はどうだろう。それに下手に数人で行って刺激してしまえば……というわけで却下である。

「……どうしよ」

はあ、という嘆息とともににとりの口から思わずそんな言葉が漏れた。行くか行かざるか、それが問題だ。ぱく、と食パンを口に放り込む。

——その時、不意にあの竜の瞳がにとりの脳裏を掠めた。そしてあの、「ぎゃう」という拍子抜けしてしまうかわいらしい声。竜は

あの暗闇の中で、ずっと一人、助けを待ち続けていたのだろうか。いくら自立稼働できるとはいえ、取れてしまったネジやボルトを嵌めなおせるほど器用には見えない。そしてようやく、長い長い時間を待ち続けて、にとりが偶然あそこを訪れたのだ。きっと今も、期待に期待を重ねてにとりの来訪を待っているのかもしれない。

……あれを裏切る？ 私はエンジニアじゃないか。壊れている機械一つ直せないでそんなことを謳えるだろうか。

にとりはがたと椅子から立ち上がり、研究室へ向かう。

「悩む何て私らしくないな」

苦笑して呟いた。

「壊れてる機械があつたら直す。当たり前じゃない」

……なんて偉そうなこと言ってまたこの地底湖にまでやってきたわけだが、やっぱり恐いものは恐かった。スペルカードも全部持ってきて完全武装状態。のびーるアームも万全の調子にしてからここ

にやってきた。……おかげで現時刻は朝というには少々苦しい。怒って無いよね朝としか言っていないしまだ朝じゃないって訳でも無いしうんうん大丈夫、とにとりは自分を納得させて恐る恐る湖面から顔を出し――。

「ぎゃう！」

「うひょえおあつ！」

因みに後者がにとりである。理解不能な奇声とバシャバシャという水飛沫を上げて存分に驚愕を示した後に、にとりはその声を振り返った。

鉄の竜の位置が変わっている。昨日はにとりの入ってきた水中洞穴の丁度反対側に座していたのだが、今は同じ側に座りこんでいた。見ればその横にあの鉄の翼も転がっている。恐らく昨日一晩かけ、えっちらおっちら引きずって移動したのだろう。

「わ、わ、わ！ いやちょっと遅くなっただけだね！？ ほらちゃんと私来たじゃん！ だから食べないで――！？」

狼狽の極地で弁明をするにとり。ああ後ろで待ち伏せるなんてひどいよ恐いよ食べられるよおと頭の中は大混乱。そんな様子を少しの間眺めていた鉄の竜だったが、「ぎゃう」と一声鳴いてつんつん翼のない肩を顎で叩いた。

「あ、あーそうだったね。うんうん、壊れてるところあるんなら直してあげないと」

そこでようやくにとりが落ち着きを取り戻し、本来の目的を思い出す。水から上がり、まずはその落ちた翼の方に歩み寄った。

やはり相当に大きな鉄の板である。正直に言えばこれが揚力を生み出すようにはにとりには見えなかった。何か妖術やら魔法とやらが使われているのかもしれないが、昨日も思ったように、にとり自身そいつたものの気配をそれからは感じ得ない。とりあえず翼を調べるのはそのくらいにしておき、次に竜の肩を見てみることにした。

「はい、ちよつと御免よ、つと」  
「ぎやう？」

ひよい、とにとりは竜の部品部品をとつかかりにしてすいすい身体を登っていく。大きな機械を組み上げることもある河童は鳶とびのような技術も身につける必要があるのだ。（竜は先ほどまでやたらに自分を恐がっていたにとりが今は平然と自分の身体を登っていくことに少しばかり驚いていた様だった）

左肩の様子は意外と酷かった。こんな暗い中では登ってみないと分からなかったが、肩の位置の鉄板がむしりとれてしまっている。おかげで内部構造が丸見えだ。たぶん落ちていた部品たちの大体はここから零れ落ちてしまったのだらう。あの池にあった二つの歯車は水中洞穴を通して流れ出していたと考えるのが自然か。

よし、とその様子を見てにとりが修理の大方の方向性を決める。まずこここの内部から直してやるのがいいだろう。幸い今見える限りの部分は前時代的な古いタイプの部品が多く見受けられる（どうやったらこれで自立稼動が出来る機械が作れるのかと拍子抜けするほどだ）。これくらいなら河童の技術を要すれば十分修理が可能である。

ふと、竜がじつとこちらを見ていることにとりは気付いた。…機械には似つかわしくない、どこか不安を持った橙色の瞳が、にとりを射抜いている。その瞳を見て、にとりの中のこの竜に抱いていた最後の恐怖が消えていくのを感じた。——この竜は無邪気にふるまってこそいたが、本当は恐くてたまらなかったのだろう。闇の中、永遠とも思える孤独。軋む身体に油を差してくれる者も無く、ただただ一人。その寂しさと恐ろしさはにとりの想像を軽く絶するに違いない。

「……オーケイ、こいつは辛いだろうね。だけど安心して。——この河城にとり、河童の誇りにかけて直させていただくよ」

にとりは自慢の帽子をぐいと上げ、そう言ってみせる。すると竜の瞳から不安さが消え、今度は期待に染まるかのように橙が若干濃さを増した。

——そんなこんなで、にとりと鉄の竜との関係が始まったのである。

## 二章

おとこは、きかいというものをつくることができました。

陰鬱な雲が空を覆う嫌な秋の朝だった。早ければ午前中、遅くとも昼過ぎには雨が降り出すのだろう。白狼天狗の犬走椀は、そんな日でも今日も今日とて妖怪の山の哨戒の仕事である。下っ端である彼女には基本的にあまり非番は回ってこない。しかし雨の日が仕事に当たるのはやはり気分の良いものではなかった。これから先は寒くなる一方の季節であるし、なにより自慢の尻尾が濡れるのは特に勘弁願いたい。

そんな朝、椀はにとりの家を目指して飛んでいた。今日は昼から哨戒の仕事が始まるため、まだ大分時間がある。こういう時間の合

間を縫って、椀はにとりを起こしに行き、朝ご飯を作ってやっていた。頼まれているわけではないしむしろ疎まれていると思うが、こうでもないとのあの「機械が恋人」とでも言い出しそうな河童はほぼ間違いなくずっと家から出ずに、碌な食事もとらないに決まっている。余計なお節介だなんだと言われようが、もとより世話焼きの椀にこれをやめるつもりはなかった。

にとりの家は河童らしく滝の近くにひっそりとある。夏場は涼しくて重宝するのだが、この時期になるとただ寒いだけだ。ひゅう、と吹いた秋風に椀は軽く身震いして、その家の玄関に降り立つ。にとりを最後に家から引つ張り出してから一週間くらいになるだろうか（あの日は夕方になってしまったが）。流石の妖怪でもこれくらいの期間を籠りきりでちゃんとした食事を取らなければ調子を壊してもおかしくない。風邪ひいてないといいけど、と椀はドアをノックした。

こんこん。

……。

……？

もう一度ノックしてみるがやはり返事はない。いつもなら寝ててもノックさえすれば起きてくるのだが……——まさか。

「ちょっと、にと——」

「んあ？」

ばんつ。

……突如開いたドアに顔面がぶつかったのだということを理解したのは、鼻にじんじんと響く痛みが脳を突き抜けてからだった。

「わ、ごめんごめん！」

おもわず鼻を押さえてしゃがみ込んでしまうと、上からにとりの声が降ってくる。ああ大丈夫大丈夫と椀が答えようと顔を上げ——へくち、というくしゃみの音に驚かされた。

「——にとり？」

鼻の痛みも忘れ、椀の口から思わずそんな言葉が漏れる。見上げたにとりの顔はほんの少し赤みがかかっていた。鼻も詰まってもいるのか、どつたの、という問いの言葉もつまり気味に聞こえる。

「あんた風邪ひいた？」

立ち上がりながら椀がそう聞くと、にとりは一瞬だけきょとんとした表情になり「あー、そういやちよつと鼻詰まってるかも」と納得したように呟いた。そして再び、へくち、とくしゃみ。風邪気味じゃない、それは完全に風邪だ。椀は予想が的中したことに頭をがりがりとかいた。

「それなら寝てなさい。今おかゆが何か作ってあげるから」

椀は当然肯定の返事が返ってくると思った、のだが——。

「いや悪いんだけど、今日はいいよ。ちよつと今から用事あるからさ」

予想外だった。え、という一文字だけが椀の口から流れ出る。にとりを見てみれば背中にリュックを背負っていて、更にいつもの水色のワンピースではなく丈夫そうな作業服をその身に着ていた。確かに今から出ようという格好である。にとりがこんなに朝早く？

「そういうわけにもいかないでしょ、出かける用事ならずらせば」「いやぁ待たせてるのがいるから」

椀はなんとか外出を止めさせようと言ってみるが、これまた予想外の反論で押し黙る。にとりが誰かと会うというのも驚きだったが、それ以上に椀はにとりがこうまでして用事を優先することが驚きだった。

「あ、ご飯つくりに来てくれたんなら、今日の夕方にしてくれたりする？ その時間ならもう帰ってると思うから」

椀が言葉を搜しているのととりがトドメの一言を追加する。こんな風に言われれば、これ以上押し通すとお節介を通り越してただの迷惑だ。ふう、と諦めたように椀はため息をついた。

「……わかったわ、夕方ね。少しは身体を大事にしなさいよ」

「尻小玉に銘じておくよん」

「おくよん、じゃないわよ」

大体銘じるのは尻小玉じゃなくて肝だよ、肝臓だよ。そう突っ込もうとした矢先、にとりが三度目のくしゃみをする。全く、大丈夫なんだろうか。

「んじゃあねー」

とん、とにとりは地を軽く蹴ると空中に浮かび上がる。そしてそのまま北東の方角へと飛んでいった。あちらのほうは藻だらけの濁った沼があるだけで、山中でもあまり妖怪も寄り付かないさびしい場所である。椀も哨戒の仕事であちらを回ったことがあるが、そういう時にも他の妖怪を見かけたことは多くはない。

とはいえそれは地図を小さく見たときだけの話で、もっと大きな範囲で見れば北東の方角には河童が多く住んでいる集落があった。にとりは恐らくそこへ向かったのだろう。何か他の河童と共同で機械を作っているのかもしれない。

まあ調子が悪くてもそこへ行くのは少々いただけないが、付き合いが増えることはそう悪い事でもないだろう。椀はそう考えることにした。さて時間もまだあることだし、仕事が始まるまでは家でごろごろしてゐるかな、と椀は自宅へと飛び立った。

おとこのつくるきかいはかみがみにもできないきせきをよびおこすことができました。

ちやぽん、にとりは湖面から顔を出した。地底湖の中は肌寒く、濡れた身体には余計にその空気は冷たく感じられる。にとりでも秋のような時期にこれほど頻繁に水に漬かることは少なかった。こりや本格的に風邪ひいちゃいそうだなあ、椀の言う通り寝てりゃよかったかもと、少しだけにとりは後悔する。

「ぎゃう！」

「おー、待たせてゴメンねえリュウノスケ」

そこへすぐに鉄竜——リュウノスケの鳴き声が背中にかかる。その声だけで自分の中から後悔が消えていくのが分かった。にとりが水から上がると、すぐにすりすり顔をとりにとりと摺り寄せてくる。この一週間毎日通っていたためか、鉄竜は随分にとりに懐いてくれた（機械が懐くというのも結構奇怪な話であるが）。そういうこともあり、にとりはこの竜に名前をつけたのである。竜だからリュウノスケ。安直といえば安直だが、名前は体を表すとも言っしこれがベストだにとりは考えた。

持ってきたタオルで頭を拭きながらにとりがよしよしとリュウノスケの頭と顎を撫でてやると、気持ちよさそうに瞳がオレンジに薄まる。

調べれば調べるほどにリュウノスケは不可思議な機械であった。どう見ても鉄にしか見えない金属なのに何故こんなにも錆が少ないのかは修理中でも全く分からないし、なにより自立稼働が出来る理由が謎だ（頭蓋にあたる部分を開けようとしたら流石に本気で嫌がるために調べようがない）。

「よーしよしよし、かわいいなあお前は」  
「ぎゃうぎゃう」

とはいえそんなのはこの懐き具合の前には些細な問題だ。にとりとしても懐かれるのは気分が悪い事でもない。思う存分頭と顎を撫でてやる。しばらくそうしてから、今日の本題に取り掛かることにした。

「よっし、じゃあ今日の修理を始めるよ。おとなしくしててね」  
「ぎゃう」

ぱん、とにとりが拍手を打つと竜がうなづく。それを確認して、にとりはひよいひよいとリュウノスケの身体を上っていった。

この一週間、内部構造の修理に関しては最初の数日ではほぼ終わっていた。歯車の噛み合う部分こそ多かったが、構造自体は本当に驚くほど単純で、むしろ零れ落ちた歯車やボルトを探すほうが骨が折れた。錆付いていた部分も皆無というわけでもなかったが、油をさせば十分に稼働できるほどであった。

次に剥がれ落ちた左肩の部分。こちらは一昨日まで修理していたことで、中々時間がかかった。この部分の金属片は探しても見つからなかったため、にとりが型を取って新しいものを作ったのである。

もちろんこちらは河童の技術を存分に応用した特殊合金。頑丈ならこの竜を形作っている鉄にも負けない自信があった。最初こそリユノスケは見たことのない金属を体につけることに抵抗を見せていたが、なんとか宥めすかしてそれを貼り付けてやると、上手いこと気に入ってくれたようで「ぎゃうぎゃう」と喜びの声を上げていた。

そして今日からは、いよいよ翼に取り掛かるところだ。

左肩に上がったにとりは、持ってきた自慢の機器を起動させる。ういんういんとギアが回り始め、リュックの中から人の手を模したハンドが取り付けられたアームが伸びだした。名を体を表すの通り、これが「のびーるアーム」である。これで結構使い勝手がいいため、にとりは自身が発明した機械の中でもこれを一番愛用していた。

伸びたアームがしっかりとあの鉄の翼を掴む。

「よっこいせつ、とおっ！」

そしてにとりが気合の一言と同時にアームを引っ張り上げる。相当に重いはずの翼がいつも簡単に持ち上がり、肩の位置にまで引き上げられた。この馬力もアームの自慢の一つである。とりあえずその位置まで持ち上げるとにとりはすぐにアームをそこに固定し、一旦リユノスケの肩から飛び降りる。そしてリュックの中からワイヤーを取り出すと、壁をよじ登って取っ掛かりなどを利用して翼の位置を固定していく。

さて大変なのはここからだ。この翼を内部の歯車と連動させるように歯車を噛み合わせていくのだが、いくら構造自体が単純と言ってもこちらは内部構造と違ってほぼ完全に壊れていた部分である。

内部のほうは破損が少なく、且つ残っていた構造を真似しながら直せたため手早く出来たがこの翼はそうもいくまい。壁から降りてにとりはリュックからカルテ——もとい設計図を取り出した。

本来、歯車を正確に噛み合わせるにはかなり綿密な計算がいる。まして今回はこれだけ巨大なものだ。一日二日で終わる代物ではない。一応昨日丸一日と徹夜をかけて計算をしたがまだまだ大雑把な分だ。これから実際にはめ込んで少しずつ修正を加えながら直していくのである。

「おーっし準備完了！ 今日からは長丁場だからね、がんばるよ！」  
「ぎゃうー！」

そうして、最後にして最大の難所修理が始まった。

かみさまたちは、それがねたましくてしかたありません。

ぽたりと鼻の頭に落ちてきた水滴に、にとりは頭上を見上げた。すると再び、ぽたり。どうやら地底湖の天井から水が漏れてきているらしい。まあそんなことはいいか、にとりはスパナを回してボルトを締め、歯車を嵌めこんだ。

ふー、とリュウノスケの翼の末端で一息をつく。今の歯車でとりあえず最低限の翼の歯車は嵌め込み終えた。とはいえ精々が多少動かせる程度で、まだまだ――やはり俄に信じがたいが――飛べるようになるには時間が必要だろう。

それに加えてこの地底湖から出してやる方法も考えなくてはならない。そこまで行くとしたら流石にとり一人の問題ではないし、他の河童たちや場合によっては天狗とも色々決めなくてはならないだろう。それが大変だとはにとりは考えなかった。リュウノスケがもう一度空を飛べるなら、自分はどんなことでもやってやれると思えたからだ。

「ぎゃ？」

リュウノスケが「終わった？」とでも問うかのようにこちらに視線を向ける。にとりはその視線に軽く笑みを浮かべてみせ、その翼から一旦降りる。

「たぶん動かせると思うよ。でもそうつとね」

にとりがそう言ってみせると、リュウノスケは驚いたように自分の翼を見た。まだ実感がないのだろう。それもそうだ、恐らく何十年何百年と壊れたままであつたのだから。

ギシリ……と。その肩から歯車の回る音がする。油を差された歯車や部品が立てるそれは徐々に滑らかな音へ変わっていき、間接部からは蒸気が噴出す。さらにそれに連動して取り付けられた歯車がその力を翼の末端まで伝え運び、ごおんと一際大きな音を上げて――その翼が、ゆっくり羽ばたいた。

正確に言うなら、翼が緩やかに下降運動と上昇運動を続けてしたというのが正しい。しかしそれは確かに、羽ばたきであつた。

「――ぎゃうぎゃうぎゃう!」

呆けていたように翼を見ていたリュウノスケがけたたましい声を上げた。見ればその瞳は興奮を証明するように赤。更に続けて翼を羽ばたかせようとしているのか、再び間接部から蒸気が噴出す。

「ちよちよちよ、ストップストップ。まだ完全には直ってないんだから」

慌ててにとりがそれを止めると、リュウノスケが勢いよくこちらへ視線を向ける。へ、と思う間にその頭がにとりに摺りついた。機械に感情が無いなどという言葉を笑い飛ばせるような、心の底から嬉しそうな声を上げて。今でこれほど喜んでもらえるのなら、飛べるようになった暁にはどれほどの歓喜を示すだろう。それを想像するだけで、にとりも思わず笑顔がこぼれた。

——そこへ無粋にも、へくちつとくしゃみが飛び出す。

リュウノスケはその音に喜ばしげな声を収めて、にとりの顔を不思議そうに眺めた。

「あー平気平気。ちょっと鼻が詰まっててね……へくちつ」

そこへ間髪居れずにもう一度。リュウノスケも少し不安なのか、赤かった瞳が薄い橙に戻っていく。

「おーいおい、そっちが心配してどうするのさ。あんたは自分の翼のことだけ心配しなよ」

なんとなくリュウノスケの瞳にばつの悪さを感じて、にとりは茶化すように言った。しかしその瞳からは不安さが消えない。

「と、とりあえず今日はキリもいいしこの辺にしとくね。翼、動かせて嬉しいのは分かるけどまだあんまり大きく動かしちゃダメだよ」

どうしようもない居心地の悪さを感じて、にとりはてきばきと修理工具をしまっていく。固定用に使っていたワイヤーやアームを戻している間も、リュウノスケはじつにとりのことを見ているだけだ。そうしてそれらをリュックに仕舞い終わり、じゃあねと手を振ってやるが相変わらず何も言わない。ただ橙の瞳がにとりを静かに射抜いている。

ほとんど逃げ出すようにしてにとりは地底湖に飛び込んだ。その背にかすかに悲しげなリュウノスケの声を聞いた気がしたが、それは飛び込んだ水音と聞き間違えたのだろうとにとりは思う。

短くはないはずの水中洞穴を、気付けば目の前に出口が見えるほど進んでいることに気付いた。にとりにはそれが竜に出会った最初の日と同じように思えた。あのときは本当に必死で泳いだなあと少しだけ苦笑して、洞穴からあの溜池へと出ると――水面を叩く炸裂音が水中にまで聞こえてきた。

まさかと思い、藻で濁った水面から顔を出すと予想通り頭に雨が叩きつけられた。見上げた空には真っ黒な雨雲が覆いかぶさってい

る。そのため時刻的には夕方であるはずなのにほとんど真夜中のようだった。さつき地底湖で鼻の頭に水滴が落ちてきたのは、この雨が土にしみこんできたのだろう。

とたんに水の冷たさがにとりの体を一気に包みこむ。歯の根が噛み合わず、がちがちという音がひどく耳に障る。まだ池に漬かったままだから寒いのだということに気付くまでに、にとりは数瞬を要した。水を蹴り上げて一気に池から上がり、持てる限りの全速力でにとりは家へと飛ぶ。速く温まりたかった。身体を包む冷たさを拭い落としたかった。

どう飛んできたかはまるで覚えていない。それでもこのときほど自分の家が見えた瞬間がうれしかった時はなかった。最後の力を絞りつくして家までの距離をゼロにし、冷たさにかじかむ手を押さえつけながらドアノブを回した。

雨が吹き込まないようにすぐにドアを閉める。途端に玄関から伸びる廊下が暗闇と化した。当然だ、月灯りも遮られるようなあの分厚い雲では。暗闇の中、なんとか電灯のスイッチを探ろうと壁に沿いながらにとりは歩き出し——がつん、と足元に何かがぶつかった。

「——あ!？」

バランスを保つ間もなく、にとりは廊下に叩きつけられる。何かに躓いたようだった。まともに掃除をしていないことがここに来て祟るとは予想外である。痛みをこらえて何とか起き上がるうとして——全く力が入らなかった。

「あ、れ？」

もう一度やってみようとするがやはり結果は同じ。起き上がろうにも腕に力が入らず、滑って何度も廊下に身体をぶつける羽目になった。気付けば黒一色の視界がぐらぐらとねじれ曲がり、それはいかに巨大な影の化け物が躍っている姿にも見えて。

何かなにやら分からぬうちに、にとりは意識を失った。

ごうごうと冷たい雨の降る嫌な秋の夕暮れだった。朝の予想通り午後から降り出した雨は勢いを増し続け、今となっても一向に止む様子を見せない。そんな雨の山をカンテラと番傘を手に犬走椀は飛んでいた。

昼番の哨戒の仕事を済ませこうしてにとりの家へと向かっているのだが、椀の胸中にはじつと焦りが生まれていた。根拠があるわけではない、ただなんとなく心がざわめいて落ち着かない。奇妙な感覚に椀はかすかな苛立ちを覚えながら、さらに山中を飛び続ける。

にとりの家が近いことを示す滝がようやく見えてきて、さらにそ

の横に小さな一軒家を見つけると椀は少しだけ安堵した。こんな寒い夜だ、何か身体の温まるものでも作ってやるう。というか自分も食べたいし——そこでふと、違和感に気付いた。

にとりの家に明かりが灯っていない。にとりが油とは違う「電灯」というものを使っていることを椀は知っていた。だからあの家は夜も明るく、遠くでもよく目立つ。なのに今は夜闇に溶け込んでいるように暗いままだった。まさかまだ帰ってきていないのだろうか、自分で言っておいて？ 椀の中の弱火であつた苛立ちの炎が中火になる。

椀は玄関前に降り立つが、やはり誰かが居るような気配はしない。すっぱかしたなあいつ、と椀はがりがり頭を掻き、一縷の望みを賭けてドアをノックした。

こんこん。

……。

デジャヴ。

椀の苛立ちがいよいよ炎に変わり、今度少し怒鳴ってやるうと心に決める。自分で言った約束をすっぱかすというのは流石に付き合いきれない。最後に残った苛立ちをドアにぶつけてやるうと、椀がノブを掴み——きい、とドアが少しだけ開いた。

「……え、開いてる？」

椀の口から意識せず言葉が漏れ落ちる。にとりがいくらなんでもこんなに無用心なことをするだろうか。椀はそのままドアを開きき

った。

そこで思考が停止した。

暗い廊下をカンテラの灯りだけが照らしている。それが照らし出すのは、水浸しとなった廊下と散乱した工具、ひっくりかえった木箱。そして、今朝に見た、あの、丈夫そうな作業服。

ぐつしよりと水に濡れた河城にとりが、そこに倒れ伏していた。

「——にとりっ！！！！」

かみさまたちは、おとこにひとつのめいれいをくだしました。

河城にとりが倒れたという話が射命丸文の耳に入ってきたのは、昼から降り出した雨は休まることなく更に強風までもが重なり、もはやそれは嵐と化していた夜中のことだった。ようやくその日の仕事を仕上げた文が耳にした倒れた理由というのは、機械弄りに没頭する余り食事も取らず……とかそういうものではなく、高熱を出して自宅の廊下に倒れていたところを椀に発見され、そのまま医者に担ぎこまれたらしい。

にとりは妹分である椀の友人で、文自身もそれなりに関係はあった。幾度が愛用のカメラの修理を頼んだこともあるし、それほど浅い関係でもない。だから倒れたと聞いたときには驚いたし、医者に担ぎこまれるほどと重ねて聞けば心配にもなった。少なくとも雨に濡れながらもこうやって病院に駆けつけるくらいには。

天狗は基本的に強いためあまり怪我や病気はしないが、それでも零ではないのでこの天狗の里には一応医者が住んでいた。医者が住

んでいるからこの家もまあ病院と呼んでも遜色はないだろう。そうして文はその病院の引き戸を開けた。

「いらつしゃ……ああ、射命丸さん」

出迎えてくれたのは文と同じ烏天狗の女性。彼女がこの里の医者――先生、と呼ばれている者だ。文も何度か面識がある。丁度廊下の向こうからあわただしく姿を現した彼女は、文の来訪に少しばかり驚いた様子だった。

「夜分失礼します、先生。河城にとりさんの方は……」

「河城さんですか？ はい、こちらにどうぞ」

そういうと先生は再び廊下を戻る。文も下駄を脱いで廊下に上がってその後に行く。とはいえその廊下を十歩も行くと彼女は脇の襖の前で足を止めた。

「椀ちゃん？ 入るわね」

椀、と聞いて文は驚いた。椀がにとりをここに担ぎ込んだということは聞いていたが、まさかそれからずっといるのだろうか？ そう考えているうちに先生が襖を開けて部屋へと入ったので、文もそれに続く。

畳張りの部屋の中にはやはり椀がいた。こちらに背を向けていて、その脇には手ぬぐいを冷やすためだろう水を湛えた桶が置かれている。そして椀の前には布団と、それに横になる河城にとりの姿があった。寝息こそ落ち着いているように聞こえたが、額に手ぬぐいを乗せられたその顔はほおずきのように、そしてその青い髪に引き立てられて一層赤く見える。

「ごめんなさいね、椀ちゃん……手伝わせてしまつて」

「いえ、いいんです先生。私が勝手に手伝っているだけで……あ。文様」

先生の言葉に振り返つた椀が文の姿を視界に捉える。一応上司に当たる文を見て慌てたように表情を整えたが、その目は友人が倒れたことに対する深憂に満ちていたことを文は見逃さなかった。

「あやややや……椀、大丈夫ですか。にとりさんの方も……」

「あ、いえ私は……それよりも、にとりが」

椀はにとりに視線を戻し、その手を両手でぎゅっと握る。しかしそれでも、にとりが目を覚ます様子はない。文が考えていた以上に重症のようだった。

「……先生、にとりさんの容態は……」

文が二人の様子から目を逸らし、横に立つ先生に問う。……彼女は結んだ口元を重々しく開いた。

「……椀ちゃんが連れてきたときには本当に危ない状況でした。ここにある解熱剤では余り効果がなく、先ほど竹林の薬師さんの方に烏を飛ばしてより安定した丹を。そちらを投与して今は大分落ち着いたようなんですが……まだ、意識が」

ぐつ、と下唇をかみ締めて彼女は言った。……彼女は医者だと前述したが、それはあくまで体の強い天狗専門だ。こういった重症の患者を扱うことは恐らくほとんどなかったのだろつ。それに加えてこの雨では竹林までにとりを運ぶ内に症状がより悪化してしまうで

あろうことは目に見えている。これ以上手の打ちようがない、という状況に歯噛みをする気持ちは文にも十分すぎるほど伝わった。

「……すみません、先生。桶の水がぬるくなってしまったから、ちよつと換えてきます」

にとりの額の手ぬぐいを代えていた椀がそう言って立ち上がり、文の脇を抜けて玄関へと歩いていく。一瞬、足をもつれさせかける姿を見て、椀が心底から心配をしているのだろうということが見て取れた。

「……射命丸さん。私ももう少し薬の調合を考えて見ます。すみませんにとりさんの様子を少し見ていてくださいますか」

「え、あ……はい」

虚を突かれて文は反射的に返事をする、先生は軽く一礼をして椀と反対の方向に静かに向かっていった。そちらのほうに自室があるのだろう。そうしてこの部屋には文にとりが残された。静かな部屋の中に聞こえるにとりの呼吸も規則的ながらも苦しげに繰り返されており、文にも痛々しい気持ちが伝わってくる。

「……——ノスケ……」

ふと。一定感覚で聞こえていたにとりの呼吸の合間に、かすかに何かが混じったのを文の聴覚が捉える。起きたの？ と文が傍に寄りその手を握ってやるが、その目は開かれない。どうやら寝言らしい。

「……り——ノスケ……」

今度はしっかりとそれを耳に入れる。「リ」と「ノスケ」、と文には聞こえた。文の思考に魔法の森の前にある店、香霖堂という古道具屋を営む店主のことが思い浮かぶ。彼は確か霖之助という名前だったはずだ。自分が作る「文々」。(ぶんぶんまる)「新聞」の数少ない購読者であつたから間違えるはずもない。

「…………リユウノスケ…………」

と思いきや次に聞こえてきた声で人違いであつた事が判明する。…………リユウノスケ。漢字で書くと龍之介になるのだろうか。文の記者として知りうる交友関係の中にはその名前はなかつた。

ずっとずっとむかしのこと。ぼくはお父さんといっしょに、ここに来た。

ここまで来る間、お父さんを背中に乗せて、びゅんびゅん風をきって飛ぶのはすごく楽しかった。…………ダイキライな「カミサマ」たちがぼくらについてきていたけれど。

そうしてやってきたここは、なんにもない所だつた。せかいのは

て、とあのカミサマたちがここを呼んでいたことをぼくはおもいだす。どういう意味なのかはわからなかった。

その「せかいのはて」という場所には、体の大きなぼくが楽々と入れるくらいに大きな大きな穴が開いていた。そのそばに下りてぼくはそれをのぞきこんでみるけれど、下は真っ暗でなんにも見えない。

——ここがいいだろう。

カミサマの一人が、えらそうに言った。ぼくはむっとしてその声が聞こえたほうをにらんでやると、こわがるようにそいつらは足を後ろにやる。ふんだ、ざまあみろ。ぼくはそれをほめてほしくて、お父さんのほうを見た。

お父さんは、くやしそうに下をむいて、ぎりりと歯をかみしめながら、言った。

「——ここに、入ってくれ」

ぼくにはその時、お父さんがなんでそういうことを言うのかよく分からなかった。お父さんはいつもあのカミサマたちがクライだと言っていたから、なんでそのカミサマたちのいうことを聞くのがふしぎでしかたなかった。

ぼくがおどおどして穴とお父さんを交互に見ていると、周りのカミサマたちがあからさまにあわてだす。まるでじぶんたちのおもいどおりにいかないことが気にいらぬ子どもみたいだった。そうした中でお父さんがぼくの顔に口をよせて、こっそりとつぶやく。

「……なあに心配すんじゃない。少ししたらすぐに出してやる。だから今だけ、ここに入ってる」

にっとうと歯を見せてお父さんはぼくを安心させるように笑う。でもぼくには、その顔がすらそうにしか見えなかった。頼む、と最後にお父さんは言う。……そこまで言われたらしかたなかった。うん、とぼくはうなずいてその穴に飛びこんだ。

暗かったからわからなかったけれど、穴はそんなに深くなかった。思ったより速く奥が見えてきて、ぼくはあわててつばさを羽ばたかせ、体を止める。そうしてからまた振り返ると、遠く点みたいになった穴の入り口が、ちょうど夜空に一つだけ星が光っているみたいに見えた。——きれいだ、と思う。

でも、それが見えていたのはほんの少しの間だけだった。いきなり地面がぐらぐらと揺れたかと思うと、ただでさえ小さかった光がどんどん小さくなっていく。ぼくはすぐにもどううかとも思っただけれど、お父さんの約束があつたから動かなかった。——そして空が見えなくなり、ぼくのまわりは真っ暗闇になる。

——これで一安心だな。

向こうからカミサマの声が聞こえてくる。見下した調子だった。

——命ですらないものが我らを脅かそうなど、分不相応にもほどがあろうよ。

——流石は賢者と呼ばれし人間。鉄屑よりは己のほうが大事よの。

その声は本当にぼくをむかむかさせるけど、なんとかこらえる。そうして、お父さんの声が聞こえた。

「——この、クソ野郎共」

それを最後に、向こうからは何も聞こえなくなった。

長い長い時間がたった。お父さんは、まだ来ない。

穴は時間がたつうちにどんどんくずれて、とてもぼくが通れるような大きさはなくなっていた。お父さんは、まだ来ない。

たまに上から垂れてくる水がたまつて、ぼくの前には大きな水たまりができていた。お父さんは、まだ来ない。

時間が経ちすぎて、左のつばさが折れたときには本当に悲しかった

た。お父さんは、まだ来ない。

本当に本当に、長い時間が過ぎた。この間、お父さんと同じ、機械油のおいがしたときには、つい飛びおきてしまった。

ところがぼくの前にいたのは小さな女の子で——にんげん、とは違うにおいがした。その女の子はぼくのことをすごくこわがっていて、すぐににげてしまつて——でも最後に言ってくれた、また来るとよ、という言葉がうれしかった。もし約束をやぶられたとしても、それだけでぼくはうれしかった。

でも。その女の子は約束をやぶらずにまた来てくれた。ぼくのかたを、つばさを直してくれた。

うれしかった。本当にうれしかった。お父さんとは顔もかたちも違ふけれど、またお父さんに会えた気がした。

——そして、今日。あの子はすぐくつらそうな顔をしていた。無理をして笑っているのが、お父さんのさいこの顔に重なった。

——そして、今。

たしかにぼくのなまえを呼ぶ声が聞こえた。つらそうな、くるしそうな声で。

ぼくは背中にかくしておいた「たいほう」を背負う。こっちはあの子には直してもらっていないけれど、たぶんこわれていないはずだ。まだ、動く。

そうしてぼくは、それを思いっきり岩のかべにうちこんだ。

——どおおおんつ。

ものすごい音がして、岩のかべが吹き飛んだ。

そうして見えたむこうは、やっぱり真っ暗。夜だった。それに、ぼつぼつとぼくの顔に水が当たってくる。風が強くて、雨も降っているみたいだった。

それに、ぼくのダイキライな、「カミサマ」のにおいもした。

……あいつらめ。こんなところにも自分の国を作ってるのか。むかむかがわきだしてくるのをなんとか抑えて、ぼくは考える。

あの子はにんげんじゃないみたいだけれど、女の子だ。——そう  
だ、花を持っていこう。きつときれいな花を見れば、元気も出るに  
ちがいない。

……それと、ごめんなさい、お父さん。ぼくはお父さんの約束を  
やぶるよ。——ぼくを助けてくれた子を、今度はぼくが助けなくち  
や。

つばさをかるく羽ばたかせて、調子を確認。あの子はまだ動かす  
など言っていたけれど、これくらいへっちゃらだ。

ぼくは大きな一声を上げて、暗い闇夜の中に飛び出した。

### 三章・終章

突如として轟いた爆音に、守矢神社の風祝かぜはふりである東風谷早苗は文字通り飛び起きた。冗談抜きで数センチほど体が浮き上がり、布団の上を転がってしまったのである。

それから数秒ほど、早苗は何が起こったのかわからず茫然としていた。暗い部屋の中は今が真夜中であることを示している。はっと我に返り、早苗は寝間着のまま自室を飛び出した。ここの神社に祀られる、二柱の神様の無事を確かめるため。

「——早苗！」

部屋の襖を開けた直後、暗い廊下の向こうから早苗は名を呼ばれた。慌ててそちらへ視線を向けると、金色の髪を持った少女が駆け寄ってくる。

「諏訪子様！」

その少女、洩矢諏訪子の体を早苗はしっかりと受けとめた。その身長は早苗の肩ほどまでしかない少女であるが、彼女こそが先ほど説明した神様の一柱である。

「早苗、大丈夫だった」

「はい、大丈夫です。それより今の凄い音は」

「——二人とも無事かい!?」

そこへもう一つの声が混じった。今度は諏訪子の来た方とは反対

の廊下から残り一柱の神様、八坂神奈子が稀に見る焦りをその顔に浮かべて駆けてきた。

「神奈子様、ご無事で」

「ああ、こっちは全然だ。諏訪子のほうも大丈夫みたいだね」

「まあなんとか。……ってか今の轟音、何？ 花火にしちゃ季節と天気がずれすぎだよね」

そう、今の音は確かに花火の打ち上げ音にも似ていた。しかし諏訪子の言う通り、今の季節は紅葉の見頃であるし、それに今夜は豪雨と風が吹き荒れている。花火を上げる状況にしては似つかわしくないにもほどがあつた。そして何より音の大きさが桁違いすぎる。

「いや、私にもわからん。大砲の砲撃音ってことは間違いないだろうが……」

軍神であるが故にその風切り音が大砲のそれであることは即座に聞き分けた神奈子であるが、「大砲」という兵器の中であればどの爆音を叩き出す様な代物は二千年以上の生の中でさえ聞いたことがない。

「た、大砲？ 今のがですか？」

早苗がぶるりと身を振るわせて神奈子に問い返した。わりと最近まで彼女は幻想郷の外の世界で暮らしており、戦争というものは教科書でしか知らない。だからこそ、今のような轟音が戦争で使われる大砲だということに心底から恐怖を覚えた。

「ああ、そうだろう。何でいきなりそんなものが――」

——そこで唐突に神奈子の言葉は遮られた。それまで聞こえていた自然的な風とは明らかに違う、すさまじい豪風が神社を揺さぶったからである。

絹を裂くような悲鳴を上げて早苗がしゃがみこみ、それを庇う様にして諏訪子、その上から神奈子が覆いかぶさる。その揺れが続いたのは十秒を超えるか超えないか程度であつたろうが、早苗にはそれが永遠の時間にも思えた。

長いそれがようやく終わりを告げ、その揺れは立ち上がれるほどには治まった。まず神奈子が立ち上がり、次いで諏訪子が未だ恐怖からの震えが止まらない早苗を支えて立ち上がらせる。

「……な、何ですか、今度のは」

それだけやつと口から搾り出して、諏訪子に支えられながら早苗が再び神奈子に問うた。だが今のは彼女にもそれとなく予想がついた。——とてつもなく速く、そして大きい何かが通り過ぎた瞬間に吹く風であると。

「……早苗、腰が抜けているところに悪い。天狗のお偉方に連絡を入れてくれるかい」

じつと天井、その更に上の何かを睨みつけていた神奈子は、早苗の問いには答えずにそう命じた。役割を与えられて早苗は落ち着きを取り戻し、そしてほんの少しだけ——いや確かに腰を抜かしてはいたのだけれど——カチン、とした。だがそのかすかな怒りのおかげで早苗は己の足でしっかりと立ち上がる。

「はい。分かりました」

力強くそう早苗が答えると、神奈子は満足げに笑う。ひょっとしたら今の怒らせるようなのもわざとだったのかも、と早苗はその笑顔を見て思った。

「よし、任せたよ。諏訪子、あんたは私と来な！」  
「は、はいよ！」

そうして神奈子と諏訪子は玄関に向かって走っていく。早苗も自分の命じられた役割を果たすため、行動を開始した。

妖怪の山の東区域。紅葉に彩られた木々が生い茂るこの辺りは、同時に多くの花も咲き乱れる区域でもある。春先にはいつぱいに咲き誇る最高の葎たちを見ることが出来るが、秋には秋で良い花たち——例えば自然薯じねんじょのような——がその美しさを競うように咲き乱れている。もっとも、今夜のような闇夜と大嵐ではそれを探しに来るような輩など居るはずもないが。

しかしその常識をぶち破ってやってきた「あれ」が、この岩一枚を挟んだ向こうにいる。

秋静葉と秋穰子、さらに鍵山雛の三柱の神が息を殺して岩陰に隠れていた。大岩の後ろに身を寄せ合うようにしてその身を隠す彼女たちは、打ち付ける雨の冷たさとは違った震えを無理やり押さえつけている。あれに気付かれぬように。

雛と静葉がほんの少しだけ顔を動かしそつと岩の向こうを覗いた。――爛々と輝く二つの真紅の光が闇の中を蠢いている。それだけではない。その傍でギリリと金属的な光が反射していた。その反射するものは、ナイフのように研ぎ澄まされた牙である。そしてそれらを持つ長い首と、何か筒のようなものを二つ背負う巨体からは油と鉄の匂いを漂わせていた。

鉄で出来た竜。それがそこにいる何かに雛と静葉が抱いた印象であつた。

「（な……んなの、あれ）」  
「（……さ、さあ……）」

静葉の当然の疑問に雛はそう返すしかなかった。

真夜中に突如として響き渡った爆音に叩き起こされ、互いの安否を確かめ合っているその時にあの竜がここに降り立ってきたのである。咄嗟にこの大岩の影に飛び込んだから良かったものの、見つかっていたらどうなっていたことかと想像するだけで恐ろしい。

竜はさきほどからあまり大きくは動いていなかった。彼女達が隠れる岩に半身を見せるようにしてうずくまり、じつと地面に視線を下ろしている。そうして少し立ち止まった後、また何歩か移動して同じように地面を見ることを繰り返していた。……何かを探してい

る姿にも見える。

「（……お、お姉ちゃん、大丈夫だよな）」

ぎゅつと静葉の手を握る穰子。……静葉からすればこの質問にはそう簡単に答えられるものではない。静葉は神といえど、持ちうる能力は紅葉を司る程度。とてもじゃないが戦闘向きのそれではなかった。同じくこの穰子の能力も豊穰を司る程度であり、戦おうなら無謀にもほどがある。唯一ここに居る中で戦闘に足る（と言えるくらい）の能力を持つのは厄神である雛のみだ。とはいえ勝てるかどうかは全くの別問題であるが。

「（……大丈夫。こうやって隠れてれば絶対見つからない）」

だがわざわざ実の妹を不安に陥れるような愚挙を静葉がするはずもない。こつん、と額をあててやった。闇の中、少しでも穰子の表情が和らいだのを静葉は見る。

「（……！ 静葉）」

そこへ雛の声がかかった。何、とそちらへ視線を向ければ竜を見るように指差している雛。それに合わせて竜を見てみれば、先ほどまでよりも深くうずくまった竜の姿があった。何かを掘り返しているようである。

「（……あいつ、探し物を見つけたみたいね）」

「（え、じゃあ）」

「（たぶんそろそろ動くんじゃないかしら。そのままどこかに行つて貰えると嬉しいんだけどね）」

もう少し堪えればあいつはどこかへ飛んでいくだろうという雛の推論は静葉と穰子の心に僅かな安堵を齎した。——それと同時に、油断も。

雛の推測は的中し、うずくまっていた竜がぐつと空を仰ぎ見て翼を広げた。間違いない、飛び立つそれだ。助かった、と雛達が思った——その瞬間、だった。

竜が飛び立つための羽ばたきは予想外の振動を響かせ、大地が揺さぶられる。それはあの轟音が引き起こした鳴動に比べれば遙かに小さいものであったが——穰子の足をぐらつかせる程度の効果は十分にあった。

「わっ」

バランスを崩した穰子がたたらを踏み、何とか転ばないように数歩じやりじやりと小石を踏みしめる。そしてそれ以上に決定的だったのは——岩の陰から体が見出してしまったことだった。

「……………あ」

その声は誰の者だったか、雛か静葉か穰子か。ひよっとしたら全員が言ったのかもしれないし、誰かの聞いた幻聴であったのかもしれない。しかしそれは些細な問題である。

重大なのは、竜がこちらに気付いた、ということだ。

ギロリと紅く紅く染まった瞳が穰子の視線と重なる。その瞬間、奇妙なことにその瞳に怨念の炎が燃え盛ったように穰子には見えた。生き物でないことを証明するような冷徹な眼であるにもかかわらず

である。向けられているものは確かな憎しみであり、年月に年月を重ねた煉獄の焰。もちろん穰子にはこの竜との因縁などないし、恨まれる道理など皆無である。まるでそれは「神」という存在自体に對しての憎悪——。

「おいっ、このやろーっ!!」

数秒ほどの静寂を引き裂いたのは、静葉の<sup>だいおんじょう</sup>大音声。ぎよつと穰子と雛（に加えて竜）がその静葉へ視線をやり、総計六つの瞳が静葉に向けられた。静葉は人差し指を竜に突きつけて、さらに言葉を重ねる。

「わ、私の穰子になんかしてみろっ、山中の紅葉を操って、た、崇つてやるぞーっ!!」

震えを武者震いへと変換して声を張り上げる静葉。荒い息を吐き半分涙を目に滲ませて叫ぶその姿は見方によつてはひどく滑稽だろう。だが今この場において、穰子は姉のその姿がどんな神よりも神々しく見えた。

時として何か強い意志をこめた行動は状況に激烈な変化を齎すことがある。人が行う程度でそれは齎されるのだから、まして神がやれば効果は絶大である。

竜は視線を静葉に固定したまますらない。ほんの少しだけ赤みが薄まった瞳で、じつと静葉を見つめている。静葉も負けじと視線を外さず、激情を露にした双眸をもつて睨み続けた。

「——ぎゃっ」

数秒ほど続いた睨み合いに終わりを告げたのは、竜の一声であった。——ばかみたい。その意味がこめられていたのであるう一声を静葉に浴びせかける。

そうして竜は静葉たちに踵を返すと、再度翼を大きく広げて、今度こそ豪雨と闇夜の中へと飛び去っていった。

「——へ、え、あ？」

ぺたん、と静葉がしりもちをつく。お姉ちゃん、静葉、とそれぞれ穰子と雛がそこへ駆け寄る。静葉は完全に腰が抜けてしまっており、二人に支えて貰ってやっとこさ立ち上がった。

「なんて無茶するの。あいつが怒って攻撃してきたら私たち全員死んでたわよ」

雛が強い口調で言葉をたたきつける。本気でそれを心配したのだろう、目がそう語っていた。

「いやごめん、なんか体が勝手に……」

「私に謝ってどうするのよ。大体ね、」

「お姉ちゃん、格好良かったよ」

雛の言葉を遮るようにして穰子がそう言う。それを聞いて雛はあきれたようなため息、静葉は照れたように頬を掻いた。

「——でも、あまり喜んでられないわね」

雛が表情を鋭くし、竜が飛び去った方角を睨む。竜と対面していた間はどこかへ飛び去ってくれば良いと考えていた雛だったが、

それでは何の解決にもなっていない。

しかもあちらの方角は——避難壕、だ。

早苗を通じて大天狗たちへと伝えられた異変は、迅速に里へも伝わっていた。

カンカンカンカン——妖怪の山に半鐘が鳴り、それは夜を割るようにして響き渡っている。それに半ば押されるように急ぎ足で進む影が三つ。文、先生、にとりを背負った椀の三人である。

「にとり、がんばって」

椀が背中のとりにと励ましの声をかける。にとりには雨合羽を被せ自身は番傘をさし、にとりが極力濡れないようににはしていたが、返事をする気力もないようににとりは荒い呼吸をするばかりだ。この状態では飛ぶわけにも行かず、こうして三人は地面を駆けて先を進んでいた。

彼女達が向かう先は山中の避難壕。妖怪の山は半分要塞でもある

ため、こういった有事の際の避難所は確保されていた。

——にしても。なんだったんですかね、あの轟音は。

ちらりと嵐の夜の彼方を見据えながら文が思う。その目にはのりくらりとした彼女にしては珍しく強い怒りが点っていた。豪雨の降る真夜中で、しかもこちらには病人がいるというのに。はた迷惑とかそういうレベルではない。

「文様っ」

椀の怒鳴るような声音に文が我に返ると、既に先生と椀は離れたところで立ち止まっていた。慌ててその後を文は追いかける。

そんな調子で山中を駆けていくと、次第に別方向からも他の妖怪達の姿がちらほらと見られるようになってきた。もう避難壕はかなり近い。

「河城さん、あと少しですからね。避難所に着いたらすぐに横にさせてあげますから」

椀と並んで走る先生がにとりの背を軽くさすりながら優しく言った。

そうしてようやくその避難壕が見えてくる。そこは切り立った岩壁をくりぬくようにして出来た洞窟であり、こうこうと明かりが入り口に灯されていた。ほう、と椀が文の横で息をつく。見ると、少しバテたのだろう。椀がぐいと汗と雨の混じった額の水を拭いていた。にとりを担いで飛ぶでもなく走ったのだ、体を鍛えている椀でも多少疲れる。

——しかし、この時点ではまだ安心すべきではなかった。いくら目の前に避難壕が見えているといっても、まだ入っていないのだから。

——どこからか、咆哮。

「——え？」

文と椛が同時に呟いて、その咆哮が聞こえてきた方向の空へと視線を上げる。それにつられるようにして先生、さらには他の妖怪達もそちらへと目をやった。もちろん空は暗闇と豪雨で何も見えない。しかし、文と椛には見えていた。烏天狗としての驚異的視力を持つ文と、千里を見通す程度の能力を持つ椛にだけは。

何か紅い二つの光が、闇と豪雨を引き裂くような速度でこちらに向かってきているのを——。

金属的な轟音と、大地を揺さぶる激震。

「それ」が再びの咆哮と大地を抉りながら着陸する際に引き起こされた地震は、そこにいた者たち全てのバランスを大いに狂わせた。ぎゃあ、うわっ、ひい、と十人十色の悲鳴を上げて妖怪達が転げる。文たち三人はそれでもなんとか転ばないように互いを支えあう。

そうしてようやく揺れと轟音が収まったとき、「それ」は文たちの目の前にいた。もうもうとした土煙を纏わせて、そこにいた。

炯炯とした紅い瞳に、見事に牙が並ぶ口。鉄の巨体と巨大な翼と、その背に背負うは二門の大筒。

——鉄、いや、機械の竜。そう文の眼にはそれが映りこんだ。

そこまで経って、誰かが甲高い悲鳴を上げた。その悲鳴が撃鉄となり、避難所前は一気にパニックに陥り、周囲で転がっていた妖怪達も我先にと立ち上がってその洞窟へと駆け込み始めた。

一方竜といえばそんな状況など気にもかけていないようで、コオオオと白い蒸気を口から吹き出しながらゆっくりとその首を回す。何かを探すように。そしてその視線が椀へと向けられた。……いや椀ではない。むしろその視線は椀の背の——にとりに、だ。

——こいつ、にとりさんを狙ってる。文はその結論にたどり着くのにそう時間はかからなかった。

「——ぎゃうぎゃう、ぎゃう」

その時明らかに何か場に不似合いな声が聞こえたが、それは恐ら

く幻聴だろうと文は判断する。そして竜はこちらへと歩を進めてきた。大地を抉っていた爪を持つ足が動くたび、軽い地震が引き起こされる。

「……ゆっくり、ゆっくり下がって」

文はスペルカードを手につけたままの体勢で静かに椀と先生に言う。本当なら即座に『天狗のマクロバースト』あたりでも叩き込みたいところであったが、竜との距離は六尺もない。あまりにも距離が近すぎる。じりじりと後ずさりをしながら何とか距離をとろうとするが、それを追うように竜も歩み寄ってくるため、間合いはほぼ変わらないままだ。

「——斉射！」

そのときだった。竜の巨体に隠されて視界から外れていた避難壕の入り口から声が上がる。直後、弾幕が竜の向こうから雨霰と放たれた。

「うわぁっ！」

「椀ちゃん！」

椀が悲鳴を上げ、にとりともども転びそうになるが先生が庇うようにして椀を支える。巨体の合間からのぞくようにして文が壕の入り口を見やると、数人の天狗たちがスペルカードをかざして弾幕を放っていた。恐らくこちらが見えていないのだろう。この闇夜と豪雨、それにちょうど竜の影になっているのだから。文が弾幕の攻撃を止めるように声を張り上げ――

「——ぎゃう！」

ようとしたが、竜の一声に重なってそれは遮られる。え、と竜を見てみれば翼を大きく広げて文、桜、先生を護るかのように囲っていた。鉄の翼は凄まじく堅いようで、あれだけの弾幕を意にも介していない。しかしこの行動は、竜にとっては被弾面積を広げるだけで何のメリットも無い筈だ。どうして、何のために。

竜の瞳が文を射抜いていた。先ほどまでそれは紅く染まっていたのに、今は暖かい橙色になっている。だいじょうぶ、だいじょうぶ——その目にその言葉が込められていた。

——この竜、一体……？ 文が真意をつかめず、思考を若干混乱させていた刹那。

「神具『洩矢の鉄の輪』あ！！」

どこん、と鈍い音がした。上空から飛来した鉄塊が竜を直撃したのである。金属同士が擦れあうような奇声を上げて、竜が真横に吹っ飛ばされた。直後、文たちは弾幕に曝されたが、向こうも気付いてくれたようですぐにそれは収まる。

そこで真っ先に動いたのは桜だった。直ぐ様走り出して避難壕へと駆け込んでいく。

「射命丸さんっ」

先生が文の肩を叩き、避難壕へと急かした。入口の方でも天狗達  
が何事か叫んでいる。先生、それに遅れて文が続ぎ、壕の入口に駆  
け込んだ。

避難壕の入口で文が振り返り、あの鉄塊が飛来してきた方向の上  
空を仰ぎ見る。壕の明かりに照らされ、闇の中にその姿が浮かんで  
いた。

「……よお、随分とまあ好き勝手してるようさね」  
「あんまり暴れると、機械でも祟るよー？」

守矢の二柱、八坂神奈子と洩矢諏訪子。先ほどの鉄塊は諏訪子の  
方が放ったものだろう、その手にはスぺルカードが握られていた。

——憎悪と怒りの咆哮。

弾き飛ばされた竜がその身を起こした瞬間に放たれたその轟音に  
は、地獄の鬼たちも震えるような激怒と並の怨霊を遙かに凌駕する  
だろう憎しみが感じとれた。瞳は橙から真紅に染まり、その眼でも  
って神奈子と諏訪子を睨みつけた。

咆哮と同時にその背の大筒が吼える。火を吹いた二門のそれから  
砲弾という猛獣が彼女たちへと襲いかかった。

ごっそり火薬が詰められているだろうその弾速はかなり速い。  
しかしそれを二者は半身を捻るだけであっさりとかわしてみせた。  
いくら威力と速度があろうと、自機狙い単発弾など大した驚異には  
なりえない。

「外れ」

侮蔑と嘲笑を綺麗に重ね合わせて彼女たちは言った。それが挑発の意味を成したのかどうかは分からないが、竜が神奈子と諏訪子を完全に敵と認識した切っ掛けとなったのは間違いないだろう。

竜がその翼を広げ、大地を蹴りこむ。爪の形に地面がめり込む程強く踏みしめたかと思うと——その巨体からは信じ難い速度で飛翔し、二者へと肉薄した。

「さあ着いてきな！」

「こつちだこつち！」

神奈子と諏訪子がそれぞれ声を上げて、竜に負けず劣らずの速度をもって彼方へと飛び去る。竜と二柱が避難壕の明かりが届かない距離にまで飛び去るのに掛かった時間は、ほとんど瞬きにも満たなかった。

「……………い、いった？」

数瞬続いた沈黙を解いたのは桜の呟きだった。その言葉が切っ掛けとなって、半ば呆然としていた避難者たちがよろよろと立ち上がり、奥へと歩き出していく。

「——桜ちゃん、射命丸さん、私たちも。早くにとりさんを横にしてあげないと……………」

「あ、は、はい」

先生の言葉に文も我に返り、壕の奥へと歩み出そうと——。

「……………んっ……………」

椛の背から身じろぎと共に声を上げ——にとりが微かに目を開いた。

ギシギシと軋みを上げるような頭痛の中で、にとりは目を開いた。ひよっとしたら機械にとって錆付いた歯車があるというのはこういう痛みを指すのかもしれないと思う。

水で濡れた窓から外を眺めたときにも似たぼんやりとした視界が、少しずつ鮮明さを取り戻していく。同時に他の感覚も目覚めてきたようで、今自分が誰かに背負われているらしいということが分かってきた。

そうしてようやくはっきりしてきた視界の中で——にとりは最初に、椛の顔を見た。

「——にとり！」

少しかすれたような声で椛が叫ぶ。自分を背負っているのは椛のようで、何で椛がそんなことをしているのかにとりには不思議に思

った。辺りを見渡してみれば、洞窟の入り口か何かにもいるのか  
周りは岩の壁。そして向こうでは豪雨の降る夜が広がっていた。

「にとりさん！ 良かった、目を覚ましたんですね」

にとりの視界へもう一人、椀のお姉さんのような存在の射命丸文  
が心の底から安堵をしたように息を吐く。さらにその横で胸をなで  
おろすのは、あまり馴染みのない女性——そういえば天狗の里で医  
師が何かをやっている人で、確か先生——もそこにいた。

なんだか状況がよく飲み込めない。軋む頭を何とか働かせて、確  
か家に着いてから唐突に意識が途切れたことまでを思い出すが、ど  
うやったらその状況からこういう状況にまで移行するのだろうか。  
医師がいるということは恐らく倒れたところを誰か（たぶん背負わ  
れているところからして椀）に担ぎ込まれたのだろうということま  
では分かるが……それでも何で洞窟に？ そこが全く繋がらなかつ  
た。

「えっと……ねえ、何か、あったの……？」

にとりがなんとかそれだけ搾り出す。その疑問に椀が答えた。

「……鉄の化け物が来たのよ。すごく大きくて、翼で飛ぶし、なん  
かこう竜みたいなの——」

鉄、化け物、大きい、翼、竜。それらの単語を聞いた途端、にと  
りの思考が滑らかに回転を始め、ほとんど一瞬で「その名前」を導  
き出した。

まさか。あの地底湖からどうやって。いやそれよりあんな状態の

翼で飛べるわけが——堂々巡りを始めた思考を止めたのは、どこか遠くから聞こえてきた金属の咆哮だった。うわつと椛が身をすくませたため、にとりがその背からずり落ちる。ふらふらとする足で何とか地面を踏みしめて——確信した。

「……——リュウノスケ、だ……」

……は？ 文、椛、先生が口をそろえて疑問の言葉を口にした瞬間——にとりはそれまでのふらつきが嘘のようにしつかりとした調子で洞窟の入り口へと駆け出し、そのまま嵐の夜の中へと飛び込んでいった。

「——えっ、ちよっ、なっ」

「——いけない！」

椛の言葉にならない驚愕の声と、先生の制止のそれを尻目に——その横を疾風を連想させる速さで文が駆け抜けた。

「椛っ、貴女はそこにいなさい！ 先生も！」

振り返りもせず、声を張り上げると、文がさらに速度を上げる。幻想郷最速と謳われる神速を持つて駆ける文が強く地面を蹴ったかと思うと、その姿が豪雨と闇の中に溶け込んでいった。

乱射乱射乱射乱射乱射乱射乱射。いくら言葉を連ねても足りないほどの弾が暴れ狂っていた。しかも乱雑に撃っているように見えてその実恐ろしく正確。逃げ道をふさぐ弾、狙い打つ弾、本当にランダムに撃って弾道を読ませないようにする弾。完全な統率の取れたそれはさすが機械というべきか。

その背にある大砲は二門どころではなく、とつくに二桁を超えていた。加えて翼や胴体からも小型の銃口が覗いており、まるで兵器庫そのものが竜となって襲い掛かってきているようにも感じられる（いったいどこに隠していたのかと甚だ疑問であるが）。

神さえも消滅させかねない苛烈を極めた火力。弾幕、という弾幕ではない。文字通り「幕」として張られた弾だ。その幕に遮断され、神奈子と諏訪子は全く竜に近づけないでいた。

とはいえ防御一辺倒というほど押されているわけでもない。暴れ回る弾の間を潜り抜けながら、スペルカードを総計で既に二十枚以上は撃ち込んでいた。特に神奈子は金属を腐食させる藤の蔓をそれに絡めている。どれほど竜に火力があるにしても、それは相当な痛手になりうる、はずなのだが――。

「（こいつ、堅すぎ！）」

一向に効いていない、というのが現実であつた。いや機械である以上痛覚が存在していないだろうから表情に出ていないだけなのかもしれないが、それを差し引いても鉄の巨体と翼に損傷があるようには見受けられない。竜が完全に攻撃に専念してほぼ一切の回避行動を取らないのはあの撃たれ強さのためであろう。

なんなんだこいつは、まるで神殺しそのもの。なぜそんなものがこの山にいるのか。しかしそんな疑問を考える暇すらこの竜は与えてくれない。

「このっ！ 土着神『七つの石と七つの木』！！」

諏訪子が宣言と同時にスペルカードを発動させた。七色の大粒弾の弾幕と七本の縦長のレーザーが竜の弾幕間を縫うようにして数発が左肩へ直撃するが――途端に烈火に燃え上がったその真紅の瞳が諏訪子を貫き、三門の大砲がそちらへ向けられた刹那。

閃光。

三つのそれから吐き出された極太の光線がその先にあつた小さな影を飲み込んだ。

「諏訪子！？」

この竜、レーザーまで――神奈子がそれに一瞬だけ気を取られる致命的にして決定的な隙であつた。それを竜が逃すはずもない。すぐさまそちらへと残りの砲口が向けられて、撒き散らされていた弾幕全てが神奈子に集中し、神を食らわんと襲い掛かる。とてもその場で回避しきれぬ量ではない。それは「幕」ではなくもはや「壁」

と化していた。

「——くっ！」

神奈子は急上昇し、その竜と弾壁から距離をとる。そのまま飛翔速度を上げていき——雨雲の中へと飛び込んだ。

豪雨を作り出している雲の中は雷が荒れ狂っている。耳を劈くような雷鳴が轟き渡り、それを掻い潜りながら上空へと抜けた。

雲の上では月と星がその光を持って夜を照らしていた。先ほどまで弾幕だけが唯一の光であった闇の中にいたため、その光でも十分に明るく感じられる。

「お、お〜い神奈子お〜」

そこへ若干間抜けさを感じさせる声が神奈子の耳へと届いた。見れば服をボロボロにしてふらふらと不安定にこちらへ飛んでくる諏訪子の姿がある。どうやらあの一撃で雲の上まですっ飛ばされていたようだった。

「諏訪子、あんた無事か」

「な、なんとかね」

神奈子が諏訪子に問いかけると、しっかりとした返事をしてその表情を引き締めた。

しかし状況が変わったわけでもない。今は何とか雲の上に出てあの竜を振り切っているものの、ここを見つけるのに恐らく一分かかるまい。なんとかしてそれまでに状況を立て直さなくてはならな

い。

だがあの強固すぎる竜の外甲に闇雲にスペルカードを撃ちこんでもダメージなど期待できそうもない。それにそもそも神奈子の持つスペルカードは既に残り一枚だ。そしてそれは諏訪子と同じだろう。先ほどのスペルでもはや後がなくなっている。

どこか一点。一点でいい。あの「鉄」でない部分さえあれば――

――そこで神奈子は、はたと気付いた。

あの竜は確かに「ほぼ」一切の回避行動を取っていなかった。それはそうだ、あれだけ堅ければ攻撃など意にも介すまい。……しかしそれはあくまで「ほぼ」だった。数万発と放たれて数千発と竜に直撃した神奈子と諏訪子の弾幕の中、恐らく二桁に届くか否かという程度の回数であったが――「避けた」ものが確かにあった。

そして極めつけは――。

「諏訪子ッ！」

神奈子が勢いよく振り返り言葉を叩きつける。

「さっきのスペルカードで当たった場所は——『左肩』!？」

「——え、あ——そうか!」

その言葉に諏訪子は雷撃に打たれたようにして表情を変えた。

そう、あの竜は異常なまでに堅いが故に、いくら攻撃を受けようとも激昂こそはしていたがあの完全統制された弾幕を延々と撃ち続けていた。それが神奈子と諏訪子にとって一番対処に困る攻撃であるからだ。そうしてこちらの攻撃の芽を完全につぶした後、あの極太の閃光を撃ちまくれば反撃の手がないこちらは間違いなく撃墜されていたに違いない。

だがしかし、あの一発を食らった直後だけは、諏訪子への怒りに全てをかなぐり捨てていた。切り札をわざわざこちらに見せてきたのだ。

これらの情報が導き出す結論は一つ。仮に弱点ではなかったとしても——あの竜の左肩には、何かある。

「諏訪子、まだスペルカード残ってるかい」

「もちろん。神奈子は？」

「おあつらえ向きに、切り札さね」

「奇遇だね、私もだ」

ピツ、と装飾を施された一枚のカードを神奈子と諏訪子はその手に持つ。切り札とは最後に見せるもの。下手に先に見せてしまえば、それは切り札の意味をなさなくなる。確実に決めるために、切り札とはあるのだ。

その時、金属の咆哮が分厚い雨雲の真下から聞こえてきた。竜がこちらの座標を捕らえたようである。

「——それじゃあ行くかぁッ!!」

「——おおッ!!」

二柱が鬨の声を上げて、雲へと飛び込む。落下のスピードを加えて一気に加速し、上昇時に半分以下の時間で雲を抜けきった。

そして視界に現れ出でたる鉄の竜。全ての砲口を神奈子と諏訪子へと向け、ここで決めるつもりなのだろう、これまでのそれとは比べ物にならない最高の火力を解き放ってきた。

「神符——!!」

「崇符——!!」

二柱の神も、己の持つ最高威力のそれをかざし——

「神が歩かれた御神渡り」！！！！  
「ミシヤグジさま」！！！！

大爆発。

雨雲と夜を消し飛ばすかのような大爆発が、幻想郷を真昼のごとく照らし出した。闇に慣れきっていたにとりの瞳は、それを直視してしまったがために、その役割を放棄した。

「うあつ……！！」

完全に目がイカれてしまい、数秒ほど瞼を押さえてもだえる。ようやくその痛みが引いていき、涙の滲む視界をごしごしと擦る。なんとか目を開けると、空には月が輝き、雨が上がっていた。信じられないが、あの大爆発は雨雲すら吹き飛ばしたらしい。

——そして、爆音の聞こえてきた方向から金属を擦り合わせるような沈痛な悲鳴。夜の空に、何か巨大なものが月光に照らされていた。それは重力に引かれて緩やかに地面へと落ちていく。

まさか、あれは。

「——リュウノスケ！！？」

にとりは再び夜の空を翔け出した。

ガンガンと殴られるような頭痛と、ガチガチ震えだしたくなる風の冷たさを無理やりにねじ伏せて飛び続ける。自分でも驚くほどの

速度が出ていたが、そんなことを不思議に思う暇はなかった。一秒でも速く——リュウノスケの元へと向かうために。

そうしてたどり着いたそこは、焦土と化していた。上空から眺めると、木々がなぎ倒され、大地はくぼみ、あきらかに大爆発だけの被害ではない。どうみても何か凄まじい戦闘があったことは明白である。

そうしてにとりはその焦土へと降り立ち、あの巨大な何かが落ちた辺りを見渡して——そこにかすかな橙の光を見つける。そして、小さな小さな、あの、声。

「リュウノスケえっ!!」

その声と光を頼りにそちらへととりは駆け寄った。

伏せるようにして倒れていたリュウノスケは、左の翼を叩き折られていた。にとり自身が修理したその特殊合金の関節は完全に砕け散っている。折られた翼も傍に転がっていて、歯車やボルトやらがそこらじゅうに飛び散っていた。

どうして、一体なんで。にとりが混乱している中、その傍にほとんど落ちるようにして二つの影が降り立つ。

「……へ、お前さん、谷ガツパの……」

「……あれ、え、にとりが何で……」

その影は、守矢神社に祀られる神、洩矢諏訪子と八坂神奈子の二柱であった。その姿はボロボロもいところで、立っているのがやつつのようにも見えた。にとりの出現には向こうも戸惑っているよ

うで、もごもごと言葉にならない何かを呟いていた。

「——ちょっと、どういうことさ!! なんてリュウノスケがこんなにボロボロになってるの!! 説明してっ!!」

「な、まさかこれお前さんが作っ——」

「そんなこと聞いてない!!」

「いや、だからこいつ暴れてて——」

「リュウノスケがそんなことするわけないでしょおっ!!」

神を相手どつても全く怯まず、にとりは容赦なく激情をたたきつける。ぐいぐいと押し迫り今にも掴みかかりそうだ。——と、そこへさらに影が降り立つ。ようやく追いついてきた文であった。

「ああ、にとりさん! なんでそんなに速いんですか、こんな遠くまで来てどうするんです! ほら早く戻って寝てないと——」

「うるっさい!——!」

にとりの凄まじい剣幕に押されて、ぐっと言葉に詰まる文。神奈子と諏訪子、それに文は自分達より遥かに弱い種族であるはずの「河童」のにとりに圧倒されていた。

「.....ぎゃ.....っ.....」

その激情の渦を収めたのは、小さな小さな、竜の声。弱弱しく放たれたその声でにとりは急速に怒りが冷めていくのを感じた。そう、こんなことしてる場合じゃない。

「リュウノスケ、大丈夫。すぐに直してあげるからね」

にとりはリュウノスケを頬をなで、安心させるように笑った。そ

して修理に取り掛かろうと——そこでリュックが無いことに気付いた。今この手にあるのはポケットに入っていたプラスチックドライバーだけである。仕方ない、今すぐ取りに戻ろうと背を向けて——

がしゃん。背後からそんな音がした。

え？ と、にとりはたった今背を向けたリュウノスケに視線を戻した。リュウノスケはどこか安心をしたような沈黙を守っている。しかし違和感がにとりの体を覆い、訝しみつつもそれを見続けて――気付いた。

右肩の鉄板が、大きく剥がれ落ちていた。

直後、右の翼がもげ落ち、甲高い金属音を立てた。続いて背中、腹部の部品がバラバラと零れ落ち始める。そこでようやく、にとりはリュウノスケの体を赤い「錆」が蝕んでいることに気付いた。それはゆっくりと、しかし確実にリュウノスケの体を蝕んでいく。

「リュ――リュウノスケ――！」

にとりが必死でリュウノスケの名前を呼ぶが、錆びの侵蝕は一向に止まらない。むしろ速さを増したようにも見える。文も神奈子も諏訪子も、眼前の光景に絶句していた。

――鉄の竜は『とてつもなく』長い時間、一切の手入れもされずに放置をされていた。それこそ永遠にも匹敵しうるほどの、である。とはいえもちろん生物ではないから死ぬことは無かったし、彼を作った製作者は徹底的なまでにその鉄の体を丈夫に作っていたから、放置されたくらいのことは竜にとってそれほど脅威ではなかった。

しかし、その超長期間の放置はほんの少し、ほんの少しずつだが

鉄の酸化現象——「錆」を引き起こしていた。少なくともそのゆっくりとした進行が左の翼を落とすほどにまで至るくらいは。

そしてしばらく時間が経つ。すると、ある河童の少女がその竜の元にやってきた。その少女が施した修理は間違いなく最善であった。それゆえに、半ば止まったかのような時間が少しずつ動き出して始めたのである。

そして最後のきっかけとしてあの二柱の神との戦い。数千発の弾の直撃と豪雨は一気に鉄を疲労させ、止めはあの大爆発。それによりとうとう、半ば停止していた時間が一気に時を刻みだした。

たまりに溜まった時間の反動として、「錆」は今を逃すまいと、竜の体を蝕んでいく——。

「リュウノスケっ、リュウノスケっ!!」

にとりの声も聞こえていないのか、リュウノスケはぐったりと力なく体を地に横たえている。がしゃあん、とついに首の部位が錆び落ち始めた。にとりの顔がいよいよ青を通り越して白くなる。

「……ぎゃ……」

ふと、リュウノスケの瞳にかすかなオレンジの光が灯った。

「——リュウノスケっ！！　大丈夫、大丈夫だからっ！」

にとりが呼びかけると、リュウノスケは小さく首を横に振った。そしてその口からパサリと、何かが落ちた。

「……え……」

思わずにとりがしゃがみこんで、それを拾う。——にとりの髪の色によく似た、青い小さな花だった。名前も無いような、花畑にあっても誰も気付かないような、小さな花だった。

花、青、直りきっていない翼で飛び出した理由。

「——え——あ、う、うあ——」

大馬鹿、とても罵るのが正解なのだろうか。ありがとう、とても感謝するのが正解なのだろうか。それともっと別の何かが、あるのだろうか。ぐるぐるぐると言葉が巡り、あふれた感情が混沌を作り出す。

だからにとりは気付かなかった。もう既に、リュウノスケの顔に

まで錆びの侵蝕が進んでいることに。カラカラカラ、とそのナイフのような牙が、錆び落ちる。

「――」

それに気付いてもにとりは何も言うことが出来なかった。ただ、そのリュウノスケの瞳をじっと見ることにしか、できなかった。

「……………ぎゃう」

それでもリュウノスケは、満足そうに――いや、これはきっと、にとりの思い込みなのだろう。機械に感情などが、有るわけないのだから。

そうして、リュウノスケと名づけられたその鉄の塊は、錆びに塗れて、ぐしゃりと、その形を失った。

からん、からから、からん。

鉄の塊から部品がこぼれだす。それらも錆に侵されて、ボロボロと崩れていく。それらのうちの一つが、にとりの足元に転がった。

――歯車、だった。

にとりはすぐさまそれを拾い、ぎゅうつと両手で握り締めた。堅い金属の冷たさがその手に感じられた。しかしそれすらも、にとりの手の中で、赤錆に蝕まれる。それでもにとりは、それを離さなかった。

——最初は嗚咽。次に泣き声。最後は慟哭。

最終的にそれは声とも言えぬ何かになって、妖怪の山に、響いていた。

それから先のことを、にとりは良く覚えていない。

泣いて、泣いて、泣いて——ただ気付いたら、全く知らない天井が最初に視界に飛び込んできた。ゆっくり身を起こして辺りを見渡すと、朝の日差しが光る窓際に、あの青い花が花瓶にいけられている。そしてポケットには、錆び付いた歯車が入っていた。

最初に飛び込んできたのは柎だった。部屋の襖が開いた音に視線をやれば、そこには柎が立っていた。一瞬だけ目を見開いたかと思うと、次の瞬間には涙で顔をくしゃくしゃにして柎はにとりを抱きしめた。

次に、先生がやってきた。見たことが無いほど冷たい表情で、まづ頬を一発張られた。ヒリヒリとする痛みにとりが呆然としていると、柎と同じように抱きしめた。

そうして今度は、にとりが初めて会う人（妖怪なのかもしれないが便宜上「人」としておく）だった。永琳と名乗ったその人は先生と同じように医者であり、にとりがいるここは永遠亭という妖怪の山から大分離れた竹林にある病院だということを説明してくれた。

今日の日付を尋ねられたので、にとりは自分が気を失った夜の翌日の日付を答えると、その日付とは一日ずれた答えが永琳から返ってきた。どうやら丸一日以上倒れていたようだった。

「ただでさえ気を失うほどの高熱で倒れてたのに、それから目を覚ましてすぐに雨の中に飛び出して、しかも射命丸さんが追いつけな

いくらい速く飛んだりしたっていうらしいから、そうなるのが当然よ」

永琳は呆れたようにため息をついた。にとりが、すみません、と頭を下げるとますますその呆れ顔は深くなる。

「私に謝るよりこちらの方々にお礼を言うほうが先じゃないのかしら？にとりさん」

……全くその通りだった。

それから三十分ほどして、まずは文がやってきた。大きな音をたてて開かれた襖の向こうに荒い息を吐きながら現れた文は、やつぱりまず、にとりを抱きしめた。聞く限り文がにとりをここに運んできてくれたらしい。感謝の意を述べる前に、思わずにとりはまた謝ってしまった。

「謝ることなんてないですよ」

文はにとりの手をにぎって優しく微笑みながら言った。

それから文は、この二日のうちに何があつたかを語ってくれた。リュウノスケが飛び出してきたという大穴（信じがたいことだが、あの地底湖から藻だらけの沼までの約七百メートル間を貫いていた

らしい」と、守矢神社の神様たちとの戦いで焼け野原と化した場所の復興が進められていること。秋を司る神の姉妹と、災厄を身に溜める厄神のおかげでこれは順調な調子で進められているそうだ。

……ただ、リュウノスケの亡骸についてはどうしようもなかったそうだ。にとりをここに運んでから文がもう一度そこへと戻って見たときには、ほとんど砂のようになって、完全に崩れ落ちていたらしかった。

そうしてしばらく話すと、文は急に真剣な表情になった。

「にとりさん。本当はこんなことを言える権利などありませんが、私はあの竜の誇りを守りたいと思っています。にとりさんが気を失っているときに、彼は私と先生、桜を護ってくれたんです。それに……あの、花のことは」

文は言葉に詰まったようだったが、すぐににとりの顔を強い視線で射抜いた。

「にとりさん。他の天狗は、あの竜のことをただの化け物として記事に書くこうとしています。いえ、もう発行されてしまっているものまである。……本当ならばそれを止められれば一番なのでしょうが……情けないことですが、私には出来ません」

「——ですが、私が見た真実を記事にすることは出来ます。にとりさん、どうか私に、あの竜のことを新聞にさせていただけませんか」

そう言い切った文の瞳は、普段の飄々とした様子からは想像も出ないほどの強い意思に満たされていた。にとりはそれに天狗という種族の強さを垣間見た気がした。そうしてにとりは、静かに首を

縦に振った。

「ぱあ、と文の表情が明るくなり、ありがとうございますにとりの手をぎゅっと握ってくれた。少しだけ痛かったが、それが嫌なものだとはにとりは思わなかった。」

文はにとりに十個ほどの質問をした。簡単ながら、深く。それでいて、心を挟り過ぎないような配慮がされた優しさを感じ取れるインタビューだった。

「ご協力感謝します、にとりさん！ 夕刊で号外を出しますから！」

そういつて今度は慌しく文は、病室を駆け出していった。

それから一時間ほどして、畏れ多くも守矢の神である八坂神奈子と洩矢諏訪子、加えて神社の風祝の東風谷早苗の三人（うち人間は一人なのだが）がやってきた。

「——すまなかった、河城にとり」

「——申し訳、無い……」

………なんといったらよいのだろうか。にとりは目の前の状況——神の二柱が頭を下げている、しかも土下座——にひどく困惑していた。ありえない。なんだろう、これは。

「……謝罪で済むようなことではないことは存じています、にとりさん。あの竜を殺め——いえ、破壊してしまった責任は、全て私達の誤認にあります。許していただけるようなことでないことも、存じております。ですが、恥を承知で、どうか私達に、謝罪を申し上げさせてください——」

一つ一つ言葉を区切るように、同じように顔を床に押し付けていた早苗は言った。にとりはくらくらと眩暈を感じた。

違うんだ、そうじゃない、だって、リュウノスケは、私が——。そう飛び出しかける口を何とか押さえつけて、とりあえず顔を上げてくれるように言った。たぶん河童でこんなことをしたのは歴史上でわたしだけだろうと、にとりは思う。

そうして顔を上げた三人にとりは——何も、言えなかった。慈悲の言葉も罵詈雑言も、何も口から出ようとしてくれない。さっきまでにとりの口はあれだけ言葉を発していたが、つたぐせに、今はうんともすんとも言わなかった。それでもなんとか、言葉をひねり出す。

——もう、大丈夫だから。

何がだ。やっとにとりが搾り出した言葉は、自分でもそう思ってしまうくらいに、そんな意味不明のものだった。

そうして彼女達は、重々しい足取りで、病室を出て行った。

午後になつて、霊夢と魔理沙がやってきた。霊夢は、異変のことについてもう少し詳しく知るために（山に着いたのはにとりが気を失つてかららしい）。魔理沙はお見舞いで来てくれたようで、バスケットにいっぱいりんごをつめてやってきた。

「それにしても、機械の竜ねえ……」

ひとしきりにとりの話を聞いた後、しゃくしゃくと魔理沙の切ったりんごを食みながら、霊夢がポツリと呟いた。

「妖術も魔法も使われていなかったんでしょ？ 非常識にもほどがあるわ」

「あー？ 非常識が生きる幻想郷でその台詞はご法度じゃないのか、霊夢？ ……ていうか何でにとりのお見舞いの品なのにそんなむしやむしや食べてるんだよ」

「もうすぐ冬でしょ？ 出来る限り食いだめしておかなきゃ」

冬眠前の熊じゃあるまいし……と、にとりも剥いたりんごを一つ取り、口に放り込む。すごく甘くておいしい。相当な高級品なのかもしれない。

「ああ、アリスが美味いって言ってたやつだからな。そりゃおいしいだろうぜ」

にとりがそれを聞くと、魔理沙は悪びれもせずにそう答えた。

「あんた本だけじゃなくてこれまで盗んだわけ？」

「失礼な。きちんと弾幕ごっこで手に入れたものだぜ。こっちの案件は借りた本全冊を返すことだ。結構死闘だったぜ」

「その本だつて元々盗んだものでしょう……」

「人聞きが悪いな、死ぬまで借りてるだけだぜ」

なお性質が悪いと思う。にとりは面識の無いそのアリスという人に同情と感謝の意を表しながら、最後の一切れをほおばった。

夕方、文の「文々。（ぶんぶんまる）新聞」が届いた。

自分とのインタビューの意見を上手くまとめた弁論の見事さ以上ににとりが驚いたことは、写真が使われておらず、それにあたっていたのは緻密な絵であることだった。その絵に描かれた鉄の竜——リユウノスケの姿はこれまた驚愕するほどにそっくりだった。

他の新聞の写真はあの日の闇夜と豪雨の所為でまともな写真は録に無かったし、あつたとしても遠くから小さくリユウノスケらしき影が写っている程度の者が精々だ。しかしこれは並みの写真よりずっと精密で迫力のある一枚だった。これほど正確に絵にするにはリユウノスケによほど近寄って観察しなければ描けないだろう。それは、ただ写真を撮ることより遥かに難しいに違いない。これはきつと、一度は誰もが手に取るだろうと、にとりは思う。

ふと、差し込む夕日ににとりは気付いた。この永遠亭は深い竹林に遮られてあまり日の光が届かないが、それでも夕日がかすかに病室に差し込んでくる。にとりは小さく見えるそのオレンジの光を見つめて——オ、レン、ジ？

「——リュウノスツ……！」

皮一枚で、なんとか堪えた。

——何を見ているんだ、わたしは。にとりは軽く頭を抑えた。ただ夕日が橙色だけで、そんなことを思うなんて。

「あらあら、無理はよろしくありませんわよ？」

唐突に背後から、聞きなれない声がした。部屋の襖が開く音は、聞いていない。だから、この部屋には間違いなく、にとり一人であるはずなのに。

ゆっくり振り返ると、空間上に奇妙な「スキマ」があつた。無数の目が覗くそこから、ずるりと、長くウェーブのかかった金髪を持った女が現れる。言葉にもならない驚愕の中、その女は名乗った。

「始めまして、河城にとりさん。私、ここ幻想郷を管理させていただいている妖怪、八雲紫という者ですわ。以後お見知りおきを」

優雅に一礼するその女、八雲紫の姿を見て、にとりはやはり言葉

を失った。八雲、という名前くらいはここ幻想郷で知らないものは居ない。何で今日は神といい八雲といい、とんでもないのばかりに会うのか。

「いえいえ、そうお硬くならないうでくださいな。私がここに来たのは単なるお節介。用があるのは確かですが、それほど重いものでないですわ」

……はい？にとりの中から紫に対する畏怖が消えていき、とたんに怪訝さが鎌首をもたげた。簡単に言えば、この妖怪を胡散臭く感じたのである。

「……あら、かといってそこまでご緩くなられるのも困り者ですわね」

むう、と紫はしかめっ面に表情が変わる。にとりよりずっと年上だろうに、正直に言えばあまり似合っていないかった。そうして紫は自分が出てきたあの空間のスキマに手を突っ込んで——ひよい、と何かを取り出した。

それは、赤錆びた歯車。思わずにとりはポケットに手を突っ込むと、入っていたはずのリユウノスケの歯車がなくなっている。

「ふむふむ、これが今回の異変を起こした機械に使われていた部品ですか。にしても随分と——」

その瞬間、にとりは紫に飛びかかっていた。突然だったために紫はバランスを崩して、そのまま仰向けに倒れこむ。畳に肉のぶつかる音がして、にとりは紫に馬乗りになった。

「……返せ。返さないと、殺す」

にとりはそう言うと、紫の首に手をかける。もし否と言うなら本気でそれを行うつもりだった。

「……失礼、少々無礼が過ぎましたわ」

謝罪をしてはいるものの、紫はにとりの殺気をさらさらと受け流していた。そして言われた通りに齒車をにとりに差出す——そこにとりは気付いた。

齒車の錆が綺麗に落ちていた。差し込む夕日に反射して、ぎらりと強く光っている。にとりが最初に拾ったそれであるのように。

「……す、すみません。どいてくださる？　ちょ、ちょっと腰が……」

はつとにとりが我に返ると、紫が苦しげに顔を歪ませて呻いていた。慌ててにとりが謝罪と共に離れる。あいたたた、と紫は腰をさすりながらゆっくり起き上がった。……見かけ以上に結構年をとっているらしい。

お礼を言うべきかどうなのかにとりが戸惑っていると、紫は静かに笑って言った。

「言ったでしょう？　ただのお節介、と」

その笑みを浮かべながら紫は再び空間のスキマを開いて、その中へと潜りこんでいく。そうしてすっぱりその中へ収まると、隙間の向こうでにとりを振り返った。

「……それと、もうひとつ、お節介を言っておきましょうか。――  
日が沈むまで、もうあまり時間が無いですよ？」

にとりは弾かれたように窓の外を見る。ただでさえ暗い竹林が、  
余計暗くなっていた。竹自体に日が遮られていることを差し引いて  
も、もう日はほとんど沈みかかっているのだろう。

そしてにとりは、病室を飛び出した。

その姿を紫は、再び笑みを浮かべて、見送っていった。

病室を飛び出したにとりは、長い長い廊下を駆け抜けて、永遠亭  
の外へと出た。そしてそのまま強く地を蹴って空中に飛び上がると、  
ぐんぐんぐんぐん、にとりは高度を上げていく。

――にとりはリュウノスケのことを何も知らない。結局なぜあそ  
こにリュウノスケがいたのか分からなかったし、誰が作ったのかと  
いうことも全く知らない。しかもリュウノスケの修理をしていたの  
は一週間と少し程度である。こう考えてみれば、いかにその関係が  
薄いものなのか分かる。

だが、しかし、それでも――にとりは。

そうしてにとりは自分の飛べる最高高度にまで飛び上がった。そうして見上げてみれば、既に空の東から半分以上は夜になっており、いくつかの星が瞬いている。西の空に目をやれば、かすかにオレンジの光——夕日が、まだ、そこにある。

——リュウノスケの瞳が、まだそこにある。

「リュウノスケエエええええ——ッ!」

だから、にとりは叫ぶのだ。あのときに言えなかった言葉を

「ありがとう……ありがとうおおおおお——ッ!」

ボロボロ涙を零しながら、嗚咽をはきながら、叫ぶのだ。

「私はリュウノスケのこと……！！絶対に忘れないからあああ  
——っ！！」

夕闇に染まる幻想郷に、にとりの声がこだまする。

その時に、どこか遠くで、それに答えるように――金属の咆哮が  
聞こえたような気が、にとりはした。

<了>

### 三章・終章（後書き）

まずはじめに、ここまでお読みいただいて誠にありがとうございます。

このような拙作に恐れ多くも大文豪の芥川龍之介の名前を使っていることを、ご容赦願えれば幸いです。

今作品は夏の終わりごろから書き始めたのですが、まさか11月の終わりまでかかるとは全く予想外でした。

プロット段階で1000文字くらいしかないのが原稿用紙100枚以上って何って感じですね。

ではではこの辺で。繰り返しになりますが、長い話をここまでお読みいただき、誠にありがとうございます。

（2008年12月1日 リペヤー）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6050f/>

---

芥川龍之介の歯車

2010年10月10日14時30分発行